

08



4

3

2

U.S.A.

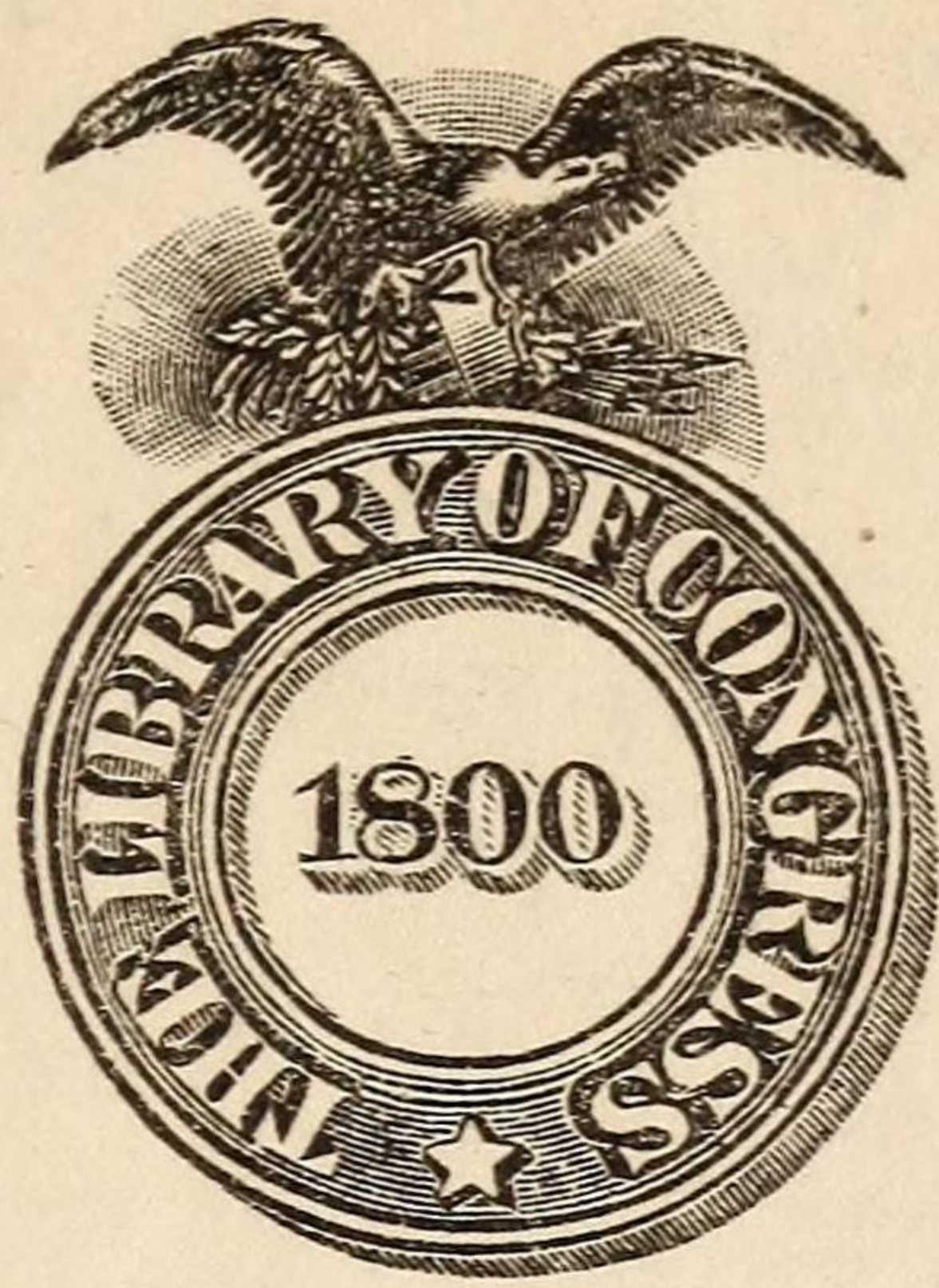
1

PERGON RULE CO.









901

A57A1







書  
上

一  
九  
九  
年  
成

山

山



Aono, Suekichi

青野季吉著

マルクス主義文學闘争

東京 神谷書店版



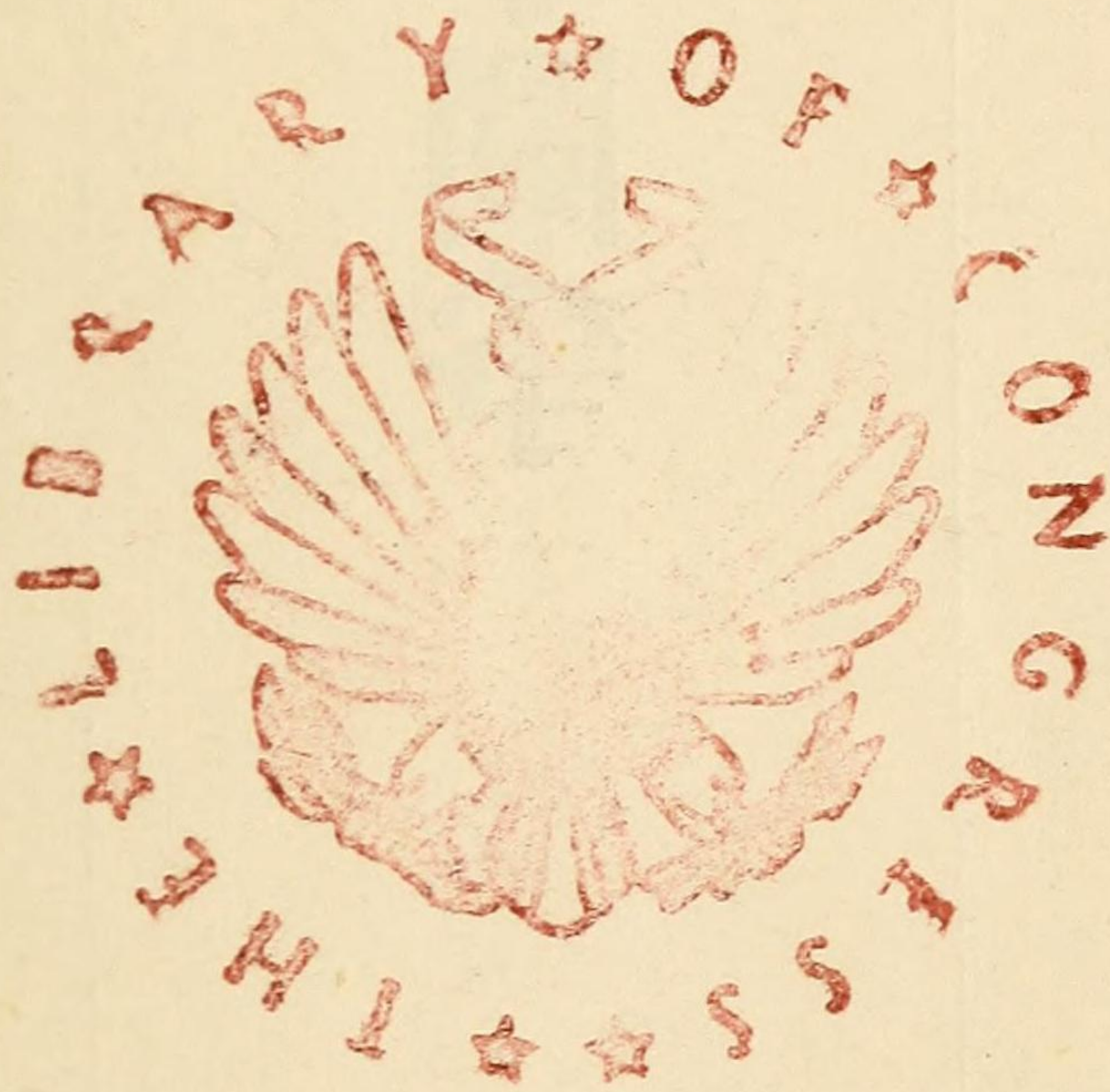
HX 531

A66

1929

Copy 2  
Asian  
Japan

3  
Copy  
12  
27  
AS





## 序

私はいまこゝに『轉換期の文學』（昭和二年二月）以後今日まで發表して來たものゝ大部分を採つて、第三の評論集『マルクス主義文學闘争』を公にする。

こゝに集められてゐる諸論考、諸論争が、一般にわが文學社會に、特殊にわがプロレタリア文學運動に、どういふ意義をもつてゐるか——それは、私の説明し得るところではなし、人々の正しい批判に待たなければならぬ。

○

この書に集められてゐる諸論稿の書かれた時期は、恰かもわがプロレタリア運動の陣營にあつては、かの福本イズムが、運動のあらゆる分野に向つて、その毒杯この言葉は、皮肉にも當時そのイズムを神的に尊崇した人々によつて、それが『清算』後に工夫されたものである！——から毒酒をそゝぎかけてゐた期間、及びわがプロレタリア運動の闘争上の實踐が、漸くにしてそれが批判・清算に着手した期間、を含んでゐる。

序



したがつてこの書の諸論稿の基調には、多かれ尠かれ、この運動全體の現實が反映してゐる。これが、この書の正しい理解のために、特に心にとめておいて欲しいことの、一つである。

○  
その時期はまた、もちろん特殊にわがプロレタリア文學運動の分野にあつても、運動の他の諸分野におけると同様に、その毒酒のそゞがれた期間、即ち、イデオロギー的には福本イズムの觀念論、實踐的には福本イズムの宗派的分裂主義が、或は露骨な、或は隱微な姿をとつて跳梁した期間、及びわが文學運動の實踐が、それが批判・清算へと一步一步と歩み出した期間、を含んでゐる。

したがつてこの書の論稿の一部は、直接に『流れに逆つて』の鬭争であり、その尠なからぬ部分の基調にも、その文學運動の現實が濃厚に反映してゐる。

これが、同じく、この書の正しい理解のために、特に心にとめておいて欲しいことの、他の一つである。

○  
プロレタリア文學批評の方面で言へば、この時期は恰かも、マルクス主義文學理論の組織時代



と言ふ名目の下に、運動の實踐から遊離し、乃至は獨立して、研究室の硝子窓の内部で、或は獨り書齋にかくれて、人々によつて『文學理論』が考究された時期である。

而してこれが當然の結果として、文學批評は甚しく抽象的、原理的となり、かくて甚しく非闘争的となつた時期である。

この書に集められてゐる諸論稿に、多かれ尠かれ、かゝる態度に疑問をもち、乃至は明白に反抗の心構への下に、書かれたものである。と言ふのは、右の如き態度は、單なる文學研究家にこそ許される態度ではあるが、かりにも現在の條件の下におかれた、マルクス主義批評家にとつて、斷じて許される態度ではない、と信ぜられたが故である。

○

廣く文壇全體に見ると、この時期の後半に、一種の明白な反動期を形ちづくり、その反動の要素として、あらゆるものが——マルクス主義の假面をつけたものすら——結びついた時期である。と共に、それと調子を合せて、プロレタリア文學の陣營内に、新たに小ブルジョア・インテリゲンチヤの足場の築かれて來た時期である。

かくて一面においてプロレタリア文學が力強く發展すると共に、他面に極めて危険なる偏向の



示された時期である。

こゝに集められた諸論稿の一部は、特にこの偏向との、直接の闘争である。かゝる偏向こそ、最も執拗に戦はる可き対象だと信ぜられるが故である。

○

この時期に残された一つの特徴は、ブルジョアジーの文壇との闘争、ブルジョアジーの文學現象の取扱ひにたいする、徹底的に言つてよいくらゐの無視・閑却である。

こゝに集められた諸論稿の一部は直接に、他の一部は間接に、この一般的傾向に反して、その闘争、取扱ひに費されてゐる。と言ふのは、いかなる口實の下においても、現在、何れの國でもなく、わが國のマルクス主義批評家が、ブルジョアジーの文壇的支配との闘争を閑却してよい理由はないからである。

プロレタリア文學理論を『組織』することも、ブルジョア文壇との闘争には、勿論、相違ない。が、そのためにブルジョアジーの文壇との直接の闘争が閑却されてよい理由は毫末もない。それに恰かも、組合運動理論の組織のために、現實の組合の現實の資本家にたいする日常闘争が、ホンの一分間でも、閑却されていゝ理由がないのと同様である。



○  
私は信ずる。人々の或るものは、思ひ切つて willkürlich な批評をこの書に加へるでもあらうが、およそものをその正しい條件において理解することを知る人々は、この書の上に正しい批判を下してくれるであらう。

一九二九・一一・一一、夜半

代々木の家にて

青野季吉







# 目次

## 第一部

|                            |    |
|----------------------------|----|
| プロレタリア文學論の展開               | 一  |
| 谷川氏のマルクス主義文學理論の批判の批判       | 二三 |
| マルクス主義文學の誤導                | 四一 |
| 科學としての批評について               | 四九 |
| 文藝批評が進展するために               | 五七 |
| 外在批評への一寄與(レーニンのトルストイ評について) | 六五 |
| マルクス主義文藝觀について              | 七六 |

## 第二部

|                   |    |
|-------------------|----|
| プロレタリア作家の個人的特性の問題 | 九三 |
|-------------------|----|



目次

プロレタリア文學の材料問題……………一〇七

プロレタリア文學と歴史的材料……………一一四

プロレタリア作家論……………一二五

日本プロレタリア藝術史論……………一五五

第三部

文學運動と政治の實踐について……………一八九

文壇反動の諸形貌……………一九八

プロレタリア文學運動の一偏向……………二一一

藝術運動上の宗派的分裂主義の諸相……………二一八

政治と文藝について……………二五〇

大衆の現實について……………二五五

第四部



|                    |     |
|--------------------|-----|
| 廣津和郎君の告白を讀んで……………  | 二六三 |
| 北氏に對立して……………       | 二七五 |
| 片上伸氏の死に際して……………    | 二八六 |
| 再び片上伸氏について……………    | 二九三 |
| 芥川龍之介氏の死に聯關して…………… | 二九八 |
| 芥川龍之介氏と新時代……………    | 三一二 |
| 現代文學者の階級的性質……………   | 三二〇 |

## 第五部

### 時論的斷片

|                |                   |                       |
|----------------|-------------------|-----------------------|
| 一つの誤謬について(三五五) | 藝術と娛樂の混同(三五八)     | 形式主義の階級性(三六〇)         |
| 『生活に歸れ!』(三六三)  | 藝術至上主義への一步退却(三六八) | プロレタリア文學の大衆性について(三七一) |
| 既成文學者の左傾(三七三)  | 新らしい人間の型(三七五)     | 徳富蘆花氏のことから(三七八)       |
| 上司氏に不滿(三八〇)    |                   |                       |



目次

第六部

プロレタリア藝術概論(講話)……………三八七  
觀念形態一般についてのノート(研究)……………四二三

— 終 —



マルクス主義文學闘争

青野季吉著



同志・前田河廣一郎に贈る。



# 第一 部

## プロレタリア文學理論の展開

—

ブルジョアジの文學は理論の推進力を完全に失つて仕舞つた。かう斷言しても、今日では何人も不服を唱へる者はないであらう。高山樗牛の理想主義的文學理論、田山花袋・島村抱月・長谷川天溪等の自然主義的文學理論、夏目漱石・阿部次郎・小宮豊隆等の唯美主義的、文化主義的理論の昔を想起すると、そこにはそれらの力強い文學理論の推進力が、創作行動の背後に働いてゐた。理論は創作を生み創作は理論を反映して、常に理論が創作をリードしてゐたと言つてもよい。だが、今日のブルジョアジの創作行動の背後には、さうした意味の理論と言ふものが、完全に



消滅してしまつた。今日のブルジョアジの創作行動は、そつういふ意味の理論の拍車をうけて推し進められてゐるのでなく、それ自身の惰性的な力によつて動いてゐるのだと言つても過言ではないであらう。事實、今日、ブルジョアジの文壇の何處に、文學理論らしい理論があるであらうか？ たゞそれだけを想ひうかべても、人は私のいまのやうな斷言に不服を唱へはしないであらう。

人は言ふでもあらう。最近のブルジョアジの文壇の例へば形式主義文學理論の如き、立派に創作行動をリードしてゐるものではないかと。私は敢て答へる。形式主義文學理論の出現には、ブルジョアジの文壇の理論的蘇生を思はせるものがあるのは事實である。だが、形式主義文學理論なるものを立入つて檢べて見ると、それは理論らしい構成をもつてゐるものでなく、いかなる意味においても前期の指導的文學理論と比され得るものではない。ブルジョアジの文壇の最後の理論的努力が形式主義文學理論を生んだとすれば、それは決してその理論的蘇生を物語るものではなくて、反つてその理論的死滅の過程を實證するものである。

ブルジョアジの文學において失はれた理論的推進力は、プロレタリアートの文學において力強く再生した。理論の權威は今や完全にプロレタリア文學の陣營に移り、およそ文壇において見



られる生々した、努力的な、體系化へと前進しつゝある理論は、悉くこれプロレタリア文學の理論だと言つてよい。

批評と理論とは、鬭争と建設の前衛的武器である。ブルジョアジートの文壇が何等かの意味において鬭争と建設の段階にあつた時には、批評と理論とが創作行動をリードしてゐた。だが一度ブルジョアジートの文壇がその段階を通過して、完成と爛熟とに達し、没落の過程に一步を踏み入れると、最早や批評と理論とは、そこで何等積極的な力と意義とを持ち得なくなつた。そうしてこの鬭争と建設の前衛的武器は、新らたにその歴史をつくり始めたプロレタリアートの文壇に移つてしまつたのである。

日本のプロレタリア文學の運動は、過去約十年の歴史を持つてゐる。この年月は、ブルジョアジートの文壇内の文學流派の運動として見れば、決して短かい年月ではない。それだけの時の経過のうちには、その流派の文學理論が一應完成され、それに基く創作が一應完成される。だが、プロレタリア文學運動にとつてはその年月は、決して長い年月ではない。と言ふ譯は、プロレタリア文學の運動は、ブルジョアジートの文壇内の文學流派の運動と根本的に異つて、一個の階級的な文學運動であり、その文學を理論的にも作品的にも完成させるところのプロレタリア文化環境の



生成と相俟つて、始めて實質的に前進し得る文學運動だからである。従つてこゝで、若しその文學理論が一應手つ取り早く完成され、それに基いた文學的創造が一應手つ取り早く完成されたら、それこそ奇蹟に近いのである。

私はいま、過去約十年の日本のプロレタリア文學運動内の、理論的努力の所産を概観しようとする。この仕事はいかなる意味においても、それを總決算して、そこに何等か『一應完成されたもの』を觀ようがためではない。いま日本のプロレタリアートの文學理論的努力は、新らしい展開と建設とへ生々と踏み出してゐる。批評的・理論的關心の波は、過去に會つて觀たことのないほど隆起してゐる。この機會に、過去の理論的努力の所産を人々の記憶に新らたにし、その展開の姿を多少とも具體的に輪廓づけて見度いからに他ならない。

二

日本のプロレタリア文學理論の展開は、これを大正十五年の『目的意識論の提唱』以前と以後とに分けて取扱ふのが便利でもあり、妥當でもある。と言ふのは、この提唱を境界として、その展開のテンポにおいても、實質においても、甚しい相違があるからである。これを言ひ換へれば、



それ以前に、漸次的に生成しつゝあつたプロレタリア文學理論が、それを堺として一つの辯證法的飛躍を遂げたのだと言つてもいいであらう。

そこで先づ順序として『目的意識論』以前から觀て行くことにする。

この時期の文學理論の內的、外的に特性的な點は、一、ブルジョアジイの文壇との鬭争の過程において、漸次にそれが展開されて行つたことである。プロレタリア文學はそれが文學運動である以上、當然文壇的ブルジョアジイと先づ鬭争せざるを得ない。しかもその鬭争は後者の社會上・文學上のイデオロギーにたいする攻撃において他にないのは言ふを俟たない。而してその攻撃は必然に、プロレタリアートの社會上・文學上のイデオロギーの積極的な展開でもあり、またあつたのである。二、その文學理論が、斷片的、素朴的、非組織的だつたことであり、當然それは謂ゆる『混階級的』だつたことである。これはいかにも當然なことであつて、そうであつたなかにも、プロレタリアートの文學運動が不可避免的に取上ぐ可き問題、後の時期において力強く展開された問題を既に一應取上げてゐたことは、大いに注目されていゝと思ふ。三、一般に外國特にロシアにおけるプロレタリア文學理論の示唆・影響が全然なかつたことである。日本のプロレタリア文學運動は、外國のそれが『質的に飛躍した』(コーガン教授)一九一七年の革命に刺戟されて



起つたのであつたが、彼地の文學的實踐は、久しい間日本のプロレタリア文學運動に何等寄與する機會を持たなかつた。従つて日本のプロレタリア文學理論は、マルクス主義的方法を唯一の指針として、全く孤立的と言つてもいゝ状態において、素朴的、斷片的に漸次に展開されたのである。

そう言ふ状態であつたが故に、種々な問題が取上げられ、この時期に相應した程度において展開されたが、そのうち歴史的、發展的意義に最も富んだもの若干を指摘しておかう。

第一にはプロレタリア文化及び文學の可能論である。ロシアでは一九二六年に至つても『まだ我が大家の間に於てさへ、プロレタリア文化乃至文學が存在し得るといふことに就いては、確乎たる定見がない』(コーガン教授)のであつたが、日本ではそれが無雜作に——或はロシアに比して無批判的と言つてもよいであらう——取扱はれてしまつて、直ちにプロレタリア文化及び文學の可能が信ぜられ、提唱された。これは必ずしも日本のプロレタリア理論家が單純であつた爲めばかりでなく、ブルジョアジの文壇との闘争といふ必要が生んだ現象でもあつたと解してよいであらう。イデオロギの分野では、プレハーノフが指摘してゐるやうに、往々かゝる現象が生ずるのである。



二、ブルジョアジの文學打倒論である。これは別に説明するまでもないが、たゞ注意を促しておき度いのは、ブルジョア・イデオロギーに由つて成る文學の打倒の必要は説かれたが、嘗てプロレタリア理論家の何人によつても、在來の文學的達成から何等攝取すべきものはないなど説かれたことが無かつたこと、これである。然るにブルジョアジの側の攻撃者は、プロレタリアの文學運動は、一切の文化的・文學的遺産を放棄し、泥濘の中に叩き込むものででもあるかのやうに言つた。これは誣妄である。當時は自然の理由から、まだ、文學上のいかなる遺産を繼承すべきかが問題にならなかつたばかりである。

三、文學運動の組織論。プロレタリア文學運動は、組織ある集團の運動として始めて發達することが出來、その組織は、他のプロレタリア運動主體と有機的に結合して始めて、階級的意義を發揮することが出来る、といふ理論が、多くの反對者——無政府主義者、一部のマルクス主義者すら——を斥けて、最初から確立され、展開された。たゞその集團の行動の規定等に関しては、勿論、明確な理論的展開を見なかつた。

四、讀者及び大衆性の問題。これはプロレタリア文學の謂ゆる第一期の進出期に起つた問題である。當時のプロレタリア文學が、事實において、インテリゲンチヤ及び少數の前衛的勞働者に



しか讀まれないのを觀て、一部の人は、その大衆化の要を唱へ、その方法として、既成の娛樂的要素を多分に取入れた通俗藝術を提唱し、それを實踐に移しすらした。これにたいしてプロレタリア文學の主流は、同じく大衆化の要を認めながら、右の機械的な方法を斥け、運動全體の力によつて漸次的にプロレタリア文學を大衆化すべきであり、また大衆化し得ると主張した。その後の事實を見ると、右の機械的方法による大衆化は全然失敗し、當時インテリゲンチヤと少數の前衛的勞働者にしか讀まれなかつたプロレタリア藝術が、今日、萬をもつて數へられる勞働者及び農民の心臓へ『喰入つて』來てゐるのである。

五、リヤリズムの固持及び『調べた藝術』論。それは勿論、部分的な、多分に自然主義的なりヤリズムではあつたが、とにかく日本のプロレタリア文學は、その出發の當初から、リヤリズムを固執して來た。そして表現主義、未來主義等々の偏向と戦つて來た。しかもこのリヤリズムの歩みが、主として勞働者出身の作者によつて、半ば無意識的に採用固執され、右の偏向が主としてプロレタリア化したインテリゲンチヤによつて、これも半ば無意識的に爲されたといふ事實は注目に價する事實である。『調べた藝術』の提唱は、恰かもその部分的、體驗的リヤリズムが行詰つた時期に、文字となつて現はれたものである。(こゝで一吋附言しておくが、プロレタリア文學



において行詰りと云ふ場合は、その大衆化への漸次的な歩みが頓挫した場合で、ブルジョア文學の場合のやうに、主として作家の主觀的條件に關聯したことはない。その提唱は『調べた』といふ標語でも示されてゐるやうに、部分的でなく全體的、個人體驗的でなく階級經驗的のリヤリズムへの進出を要求したものであつた。これは正に、謂ゆる綜合的リヤリズムへの素朴的な要求の現はれと言つて差支へないであらう。

この時期には、これらの理論的展開があつたに拘らず、根底的にそれを裏付け、やがてそれを組織し、統一すべきイデオロギーの意識的高揚も、把握もなかつたと言つてよい。そこで『目的意識論』の提唱が、この時期の自然發生的状態に終結を與へ、意識的プロレタリア文學運動の扉を開いたのである。

### 三

『目的意識論』の概要は、『プロレタリアの文學は、自然に發生し、生長する。それは何ものをもつても抑へることが出來ない。また自然生長があればこそ、運動が成り立ち、それが必然となるのである。しかし自然生長は、飽までも自然生長であつて、それが目的意識にまで質的に變化する



ためには、その自然生長を導き、引上げる力がなければならぬ。……プロレタリア文學運動は飽くまでも、目的を自覺したプロレタリア藝術家が……自然生長的なプロレタリアの藝術家を目的意識にまで……引上げる集團的活動である。そこに運動の意義がありそこに運動の必然がある。……『青野季吉「轉換期の文學」』と云ふにあつて、それは要するにプロレタリア文學及び文學運動に、プロレタリア・イデオロギーの徹底的浸透を求めたものに外ならなかつた。

この提唱は一方では文學運動の組織の上に、他方では文學理論そのものゝ上に、劃期的な展開を與へた。即ちその組織の上では、プロレタリア・イデオロギーのヘゲモニーを執らない、例へば無政府主義的要素は、これをモメントとして清算された。文學理論の上ではプロレタリア・イデオロギーの高調、體驗的・部分的リヤリズムの止揚が、力強く前面に押し出された。

だが、それにも拘らず、その理論的努力が甚しく機械的な偏向を執つたのは、事實である。たとへば組織論の上でプロレタリア文學團體をもつて、前衛的組織と誤認した偏向や、文學理論の上で一部の人々によつて謂ゆる『進軍ラツパ主義』が唱導された如きは、その顯著なものである。この責任の一部は確かに、提唱の仕方が、かなり簡潔であり、約束的であつたことに在る。だが、その責任の他の部分は、文學及び文學運動をそれとして取扱はないで、當時マルクス主義政治理



論界を支配してゐた謂ゆる福本主義の機械的・公式的理論を、そのまま文學及び文學運動に、無批判的に當てはめたことに存する。

それによつて現在までのプロタリア文學理論的發展の過程は、これを要するに『目的意識論』によつて示唆された方向の徹底、それから生じた諸偏向の清算の過程であつたと言つてよい。例へば極く最近『政治的價值と藝術的價值』の問題を提出した平林初之輔氏は、その提唱をもつて『目的意識の昇華』だと註釋してゐる。

『目的意識論』は言はゞそれまでの自然發生的な、組織論、作品論、批評論にたいして、基礎的な、根本的な出發を促したもので、プロレタリア文學理論は、當然、これをモメントとして、統一化、組織化への方向を執り、特殊化、具體化へと進出しなければならぬ約束をもつてゐた。またその約束は、徐々にそれ／＼の集團の理論的努力によつて多かれ尠かれ果されて來た。

この提唱は、やはり前期的特性をもつて、一般に外國特にロシアの文學理論的努力とは、直接何らの關係なく、日本のプロレタリア文學運動それ自身のうちから、辯證的に展開されたものであつたが、恰かもこの前年にロシアのプロレタリア文學運動は、『ロシア共産黨の文藝政策』に現はれてゐる理論的努力をなしてゐた。そしてその努力のうちに、黨（プロレタリアートの前衛的



組織)と文學運動の關係、プロレタリア文學運動と同伴者との關係、文藝批評の基準の問題等の根本的な問題が、決定的に取扱はれてゐた。これを我々のところにおける『目的意識論』にくらべると、その準備と、その規模と、その具體性において決して同日の談ではないが、そしてまたそれはロシアのプロレタリア運動の進行と、日本のそれとが同日の談でないと同じに、當然のことであるが、それにも拘らず恰かも時を同じうして、同じ基礎的な理論的努力が、この世界の二つの部分にあつたと言ふことは深い意義のあることでなければならぬ。だが、これは決して偶然事ではない。と言ふのは、プロレタリア文學理論は世界的共働によつて建設されなければならぬほどの未墾地であり、しかも各國のプロレタリア運動は、國際的プロレタリア運動に、多かれ少かれ合流して進行してゐるからである。

#### 四

『目的意識論』以後のプロレタリア文學理論の特性的な點は、何人にも明かなやうに、第一には、それが組織的、統一的方向をとつて進んで來たことである。前期のやうに素朴的、抽象的、孤立的な形において問題が把握され、展開されるやうなことがなくて、ともかく文學理論は體系的構



成への努力の方向を執つて進んで來てゐる。第二、それは、前期においてはブルジョアジーの文壇との闘争の過程において、徐々に展開されたものであつたが、この期に及んでは、プロレタリア文學運動自體の内部的闘争の過程において、可成り急速なテンポをもつて展開されて來たことである。それと言ふのはブルジョア理論の闘争力が極度に、弱化し、乃至は消滅すると共に、プロレタリア文學運動の陣營内に、問題が具體化し、特殊化し、それにつれて理論的對立が當然な理由で、發展したからである。第三、それは前期においては、プロレタリア政治理論と、多かれ少かれ關聯して展開されたとは言へ、まだその關聯の度合、結合の程度は、稀薄であつたと云へる。だがこの期に及んではその度合、程度が比較にならぬほど緊密にたり、層一層緊密な關係に這入り込みつゝ展開されたことである。たとへばプロレタリア政治理論の方面で、前衛と大衆の機械的分離理論が前景を占めて來ると、プロレタリア文學運動の組織理論の方面において、それと符節を合した理論的方向が執られ、前衛と大衆との有機的、組織的結合の必要と、その組織理論が政治方面の前景に掲げられると、それと同じ必要を楨杆とした理論が、文學上の理論的努力の日程に上ると言つた類ひである。第四、この時期には一般に外國特殊にロシアにおいて達成されたマルクス主義文學理論が、非常な熱心をもつて、我々のところへ紹介され、それが我々のと



この文學理論の展開に力強い拍車となつたことである。この事實に大いに留意しておく必要がある。この期におけるプロレタリア文學理論が、急速なテンポをもつて展開し、こゝに一種の批評時代、理論時代を現出したについては、他の諸條件の共に、この條件が大いに貢献してゐる。ブルジョアジーの前代の諸文學流派の理論が、ヨーロッパにおける達成を攝取して、乃至は直輸入して、急速に一應完成された反して、プロレタリアの文學理論にはその理論上の本源がなかつた。が、この期に及んで始めて、その本源と我々のところとの流通の路がひらけたのであつた。かくて、これまでは單獨の努力によつて展開された文學理論が、國際的共同努力によつて展開される事情となつたのである。たとへば問題の『ルナチャルスキーのテーゼ』のごとき、いかに我々のところの文學理論の展開に、有力な楨杆として作用したことであらう。またかの綜合的リズムの提唱のごとき、我々のところの實踐的方向がよし自然發生的にそこに向つて進んでゐたと言へ、その理論的基礎づけが、いかにマーツアの『歐洲プロレタリア文學の道』に負ふところがあつたかは、説明するまでもないであらう。

我々は次に、然らば、我々のところの文學理論が、いかに具體的に展開されたか、その最も重要なもの若干の觀察に移るであらう。



## 五

この時期に入つて日本のプロレタリアートの理論的努力は、先づ文學運動の組織理論の方面に、ついでプロレタリア文學の全内容の方面に輝かしい進出を見せた。だが、それと共にプロレタリア文學運動の陣營に二個の意見の對立、二つの傾向の對立が明白となつた。それは今日誰でも知つてゐるやうに、『文藝戰線』を機關とする團體のそれと『戰旗』を機關とする團體のそれとである。この二個の團體の對立はヨリ多く政治的理由によるものであるが、それ／＼の政治的意見は、何等かの形態において、文學上の理論に反映せざるを得ず、事實またそれは最初は明白の形をとつてゐなかつたが、問題が具體化されるに従つて、漸次に明白となつて來たのである。だが、その對立は、一切の取上げられた問題において見られる譯でなし、問題によつては二つの團體の見解が、かなり接近してゐる場合、乃至一致してゐる場合すらある。これは寧ろ自然なことと言つてよからう。

文學運動の組織理論はこの時に決定的に明白になつたと言つてよい。プロレタリア——マルクス主義——文學團體は、原則としてマルクス主義黨に附屬し、その一つの機關として初めて、十



分な意味はにおいてその名に値するものたることが出来る。これは最早確立された意見であつた。だが實際的に言つて、それならば現在實質的にマルクス主義黨として認め得られ、その下にプロレタリア文學團體が附屬す可き黨は、果して何處に求められるか？ といふ問題になると、そこに二つの意見が對立してゐるのである。更にその文學團體の内部と構成に關する理論になると、一層その對立が鮮明になつて來てゐる。

文學團體の主體は藝術技術家をもつて構成すべきであり、その主體の外側に、文學藝術的大衆を結合すべきである、といふのがだいたい一方の意見であり、文學團體の組織をもつて、事實上、ほぼ政治團體の組織と同一的に取扱ふのが、他方の態度である。そして前者が、その組織および運動において、純粹型を主張してゐるに反して、後者が實に混合型をとつてゐるのは、その主張からの當然の所産と言つてよいであらう。

この時期においてプロレタリア文學の内容及び形式の問題が、それについて最も熱心に追求されたが、その結果は、謂ゆる総合的リヤリズムの理論である。

曩にも一寸述べておいたが、日本のプロレタリア文學は、既に前期の終る頃から、事實的に、この方向を執つて進んでゐたのが、こゝで理論的に意識化され、一層それが前方に押しやられた



に過ぎない。こゝでも、事實が理論に先行したのである。この理論の構成者は藏原惟人君等であつた。私はいま、これが説明を便宜上マーツアの『歐洲プロレタリア文學の道』からかりて來よう。『……若しも藝術家が、プロレタリアの現實のエピソード的な、隔離された偶然な場面及び現象の限界によつて満足しないならば、若しも彼がすべてのエピソード、すべての偶然の中に全體としての現實との聯繫、過去及び未來への歴史的道程との聯繫を見るならば——その時彼は必然に啻に卑俗なる自然主義をのみでなく、またそれが個人的な（廣義に於ける）現象の隔離されたる選擇をのみ許すといふ限りにおいて、分析的リアリズムをも棄てて、総合的リアリズムの道に進んで行かなければならない。……総合的リアリズムがその形式的プランに於いて、分析的ブルジョア的リアリズムと異なる所は、先づ第一に、現象と思想とは廣汎な、辯證法的理解によつて決定されるコンポジションの性質にあるのであるから、我々はこの総合的コンポジションの基本的性質を強調しなければならぬ。』

日本で展開された総合的リアリズムの理論は、主としてこの引用文中の聯繫を高調したもので、それはまた與へられた日本プロレタリアートの現實から當然なことでもあつたのである。日本のプロレタリア文學の作品と批評とはその出發の頭初から常にリアリズムを固執し、諸種の小ブル



ジョアの惑亂に發した傾向と戦つて來たが、綜合リヤリズムの理論と共に、そのリヤリズムはプロレタリア的に一應徹底したものとなつたと言つても、差支へないであらう。

それについてプロレタリア文學の理論的努力が、最も多く消費されたのは、謂ゆる大衆化理論であらう。この問題は、これを一應解決のついた問題としてゐる人々があるやうだが、正しくはまだ解決のついてゐない問題である。現にこの月の『新潮』にも、勝本清一郎君はこの問題について、注目すべき意見を述べてゐる。

大衆化の問題では、藏原惟人、林房雄、中野重治、青木壯一郎等の諸君が最も熱心に討究したが、いまその概要を見ると、プロレタリア大衆の間に實在する層の相違、文化水準の相違、年齢の相違等を基礎として、プロレタリア文學の分化——たとへば高級文學、通俗文學、少年文學等等へ——の必要を説く者と、その機械的な取扱ひ方を非難するものが存在するやうである。特にそれは『藝術性』に關する論點と關聯して、一層問題を生んでゐる。

この點で最近注目すべき理論を展開したのは、前記の勝本清一郎君の論文である。勝本君は『プロレタリア藝術の確立運動は、大衆化運動と結びつかなければならぬ。プロレタリア階級の中こそ、將來に於ける新らしい建設的な生活内容の萌芽があり、次代の新らしい「藝術性」のため



の諸條件の準備がある筈だからである。その中へと擴大して行かなければ、それらを獲得することが出来ぬ。即ちプロレタリア藝術は、大衆化して行くことによつて、次第に藝術性を喪失してゆくどころか、かへつて益々新しい内容と、形式と、それを裏づけるべき新「藝術性」の諸條件とを、みづからの肉とも血とも骨髄ともなして行くのである云々』と言つてゐる。

プロレタリア藝術の確立運動と、大衆化運動とが結びつかなければならぬことは、こゝで勝本君によつて新らしく強調されてゐるが、曩にも述べたやうに、日本のプロレタリア文學の理論的努力において、曾つて素朴的に展開されたものであつた。プロレタリア文學は、元來プロレタリア大衆の文學であり、プロレタリア大衆の文學であつて始めてその新しい藝術性を獲得して來るもので、いかなる意味においても、そこに謂ゆる高級の純藝術と、低級の通俗藝術とを區別さるべきでない。プロレタリア藝術の大衆化は、そう言ふ機械的方法によつてでなく、プロレタリア文學運動全體の大衆的進出と相俟つて、次第に新しい藝術性をくみとつていつて初めて實現されて行くのであり、また行かねばならぬものである。尤も、現に、プロレタリア大衆の中には、層の相違、文化水準の相違等が存する以上、大衆化の實踐には飽までそれを忘却してはならないが、しかしその認容は、決して直ちに高級文學と通俗文學との區別を必要とするものではない。



問題はモット根本的な點に在るのである。

それは兎に角として、この時期に展開された理論のうちで、最も多産的な、最も重要なものは、大衆化を中心とした理論であつて、この問題は、單に現在プロレタリア文學が大衆の心臓に入つてゐないからこれを、早速どうかしなければならぬと言つた見地からでなく、もつと本質的な見地から、これからもますます論議され、展開さるべきものであり、また爾かあるであらうと考へられる。

## 六

極く最近プロレタリア文學理論の展開に、一つの貢献を與へたものは平林初之輔君の謂ゆるマルクス主義文學の再検討——『政治的價值と藝術的價值』との考察である。尤も、この考察はそれ自身がプロレタリア文學理論に貢献したと見べきでなく、それによつて先進理論分子の間に重要な問題の再認識が惹起されたと言ふ、消極的な性質のものである。

平林君の主張は、餘りに知れ渡つてゐるから、こゝに説明するまでもないが、要するにプロレタリア文學をもつて、政治的價值がヘゲモニーを握り、藝術的價值がその下に隸屬する文學、政



治的文學であるとし、それをプロレタリア文學の文學としての特性であるとしたものである。これにたいして先進理論分子は、ほとんど擧げて批評し、論難したと言つてよい。その批評や論難は勿論一樣ではないが、政治的價値と藝術的價値とを機械的に切離すことの誤謬、プロレタリア文學の價値をかく二元的に取扱ふことの誤謬を指摘する點では、ほと一致してゐたかのやうに思ふ。

この『再検討』は、プロレタリア文學存在の根本問題に觸れたものであつて、この時期にかゝる根本的な疑問が、しかも平林君のやうな先進理論分子によつて掲げられたのは、一見不可思議のやうであるが、しかし平林君が、よしその論旨は間違つてゐるにしても、かゝる根本的な疑問を掲げて來たについては、個人的な理由をおいて他にも相當に理由のあることだと考へられる。

日本のプロレタリア文學理論は、この時期に入つて、前に述べたやうに意識的となり、具體的となつたが、それが意識的となり具體的となるにつれて、殆んど常に問題を根本にかへして、これまで多かれ尠かれ曖昧にされ、十分に意識的に把握されてゐなかつた點が、再検討されなければならぬのは當然である。例へばいまの大衆化の問題の場合でも、諸先進分子の理論のうち、常に根本的な問題の再検討が見られたのである。平林君の場合は、たゞそれが、プロレタリア文



學の文學としての存在權さへも疑ふやうな歸結に到達してゐるので、一つの強いショックとなつたに過ぎない。

我々は、ここに日本のプロレタリア文學理論の展開の跡を輪廓づけて來たが、この足跡に明らかに觀てとれることは常にそこには、内につままれてゐるものが、次第に外に意識的に取り出され、抽象的な認識が具體的把握にと進み、諸々の偏向が勇敢に清算され、共同的な努力によつて建設がなされてゐるといふことである。

文學理論は、いまや完全に、プロレタリアートのものである。(四年六月)



## 谷川氏のマルクス主義文學理論の批判の批判

マルクス主義文學理論は、いま、生成の過程にある。世界的共力の下に、建設の途上にある。そこには、まだいくたの矛盾があり、いくたの分析を経ないものがある。それは當然すぎるほど、當然な話である。だからそこでは、どれほど再吟味が行はれてもいゝ譯であるし、どれほど疑問の提出があつてもいゝ譯である。否、それが、マルクス主義文學理論の建設のために、此上なく望ましいことである。

だが、マルクス主義文學理論は、爾く生成の途上にあり、そこにはまだ矛盾や、分析すべきものがあるにしても、その理論の依つて立つべき、言葉を換へて言へば、その上にその論理が建築さるべき、礎石―基礎的な見地は、既に確乎として横へられてゐる。それは言ふまでなくマルクス主義の方法に基いて把握された階級藝術觀の見地である。プレハーノフの言葉をかりて説明す



れば、『社會的意識は社會的存在によつて決定される……』されば『あらゆる「イデオロギー」——  
従つて藝術及び所謂美文學も亦——は、與へられたる社會、或は——我々が階級に分たれたる社  
會を問題にする場合は——與へられたる社會階級の努力及び氣分を表現する』(論文集「二十年間」  
第三版序文) といふ見地である。

この基礎的な見地は、若し何等かの仕方において之を放棄するとすれば、マルクス主義文學理  
論の建築は、恰かも砂上に樓閣を築くと同様な結果に陥つてしまふのである。それは明らかに、  
マルクス主義文學理論の全的の否定である。

私は、この全的否定の企てを谷川徹三氏の『マルクス主義文學理論の一批判』(『思想』再刊號)  
において觀てとることが出來た。爾くこの一文は、マルクス主義文學理論の依つて立つ基礎的な  
見解に肉迫し、その『誤謬』を指摘したものである。

二

谷川氏のこのアンビシヤスな論文の前半は、平林初之輔君の『政治的價值と藝術的價值』に展  
開された見解を、谷川氏の仕方において肯定するために——諸マルクス主義先進文學理論家の『矛



盾』を指摘しつゝ——費されて居り、後半にいたつてマルクス主義文學理論の基礎的見解を一舉に片付けて、氏自身の藝術觀を展開——實はほんの斷片的に——してゐる。(平林君の右の論文に展開された見解は、その論旨はともかくとして『藝術的價值』なるものを分離させて來た以上その本質を説明しなければ徹底しないのは明らかで、谷川氏は恰かも、こゝで平林君の役目を引受けたかの觀を呈してゐる。否、平林君は谷川氏のために、よきキツカケを與へたと言つてよいかも知れない。『マルクス主義者』の手によつてデカに『藝術的價值』が遊離された以上、そのキツカケを捉へて、藝術の超社會性、超階級性、『普遍人間性の要請』を展開して來ることは急阪へ石を轉がすよりも容易であり、これ以上、マルクス主義文學理論を覆へす巧妙な遣方は、一寸考へ得られないであらう。)そこで谷川氏が、その前半においていかに腐心して『藝術的價值』の獨立化をはかつてゐるかを觀るのは、興味ある仕事ではあるが、しかし後半の積極的な部分を検討することが遙かに根本的であり、且つ重要であるので、私はこゝではたゞちにその部分に歩み寄ることにする。

それならば谷川氏は、どういふ論據をひつさげて、マルクス主義文學理論の基礎的見解に肉迫してゐるか？ また氏の藝術觀を、どういふ論據によつて支へてゐるか？ 先づ、それを調べて



見やう。

氏は、一切の出発點を氏の藝術享受の實際においてゐる。氏は言ふ、『われ／＼は「神曲」をもつて單にその時代の或る階級の心理を理解するに資するのみのものとすべきであらうか。それだけであれ／＼は満足出来るか。そこにわれ／＼は、今になほわれ／＼の心を打つ高い魂の鳴り響くを感じないか。』と。また云ふ、『なるほど自然にたいする感情に於て原始人と文明人とはしばしば根本的に異つてゐる。また親子の關係、感情の如きも、社會の組織と制度との相違によつて、根本的に異つた側面を示す。歌舞伎劇に於ける義理と人情との柵は、われ／＼に多くの不自然と不合理とを感ぜしめる。しかしそれは結局いづれも側面的事實である。われ／＼の中には今も原始人の自然にたいする恐怖がある。われ／＼はギリシヤ人がその中に美を感じなかつた荒々しい自然の風景にも美を感じるが、しかしギリシヤ人が美とした「泉と綠蔭と牧場」との風景にも美を感じる。頭では不自然と思ひ不合理と思ふ義理人情の柵がしば／＼われ／＼を泣かしめる。』と。氏はこれによつて、實はこゝではこれだけによつて、藝術には變化的側面と不變的側面とがあることを説明してゐるのである。そこでマルクス主義文學理論の基礎的見解にたいする氏の批評は、自ら明白である。その見解は、その變化的側面を明らかにしはするけれども、不變的側面を説明す



ることは出来ない、と氏は非難する。『藝術品を藝術品として』取扱はないで、『單なる歴史的ドキユメント』に終らしめる、と氏は非難するのである。

ところでこの變化的側面と不變的側面の存在は、氏によつて次のやうに解釋され、その歸結として、藝術は最も多く不變的側面に依存するといふ、氏の藝術觀が横へられてゐる。『現在の中に常に過去がふくまれてゐる。一つの時代はそれに先行する時代を離れては考へられない。従つて一つの時代にゐるといふことは、何らかの形においてそれに先行する時代を豫想してゐる。これを別の方面から言へば、文化の傳統に於てわれ／＼はいはば意識的連續を保持してゐるのである。そこには變化的なるものゝうちに不變的なるものが見られ、不變的なるものゝうちに變化的なるものが見られる。變化的なるもの差別的なるものを見ないのはうそである。しかし不變的なるもの共通的なものを見ないのもうそである。その不變的共通的な側面において、われ／＼は普遍人間性の概念を得る。勿論この普遍人間性は一つの假設である。或は要請である。しかしそれはたとへば「かはらぬ人情」といふやうな言葉が示してゐるやうに、相對的の意味では現實に歴史的に顯現する。それはいはゞ特殊中の普遍である。藝術は實にかゝるものに最も多く依存するといふべきではないだらうか。藝術は、階級的イデオロギーによりも「かはらぬ人情」により多くもとづくといふ



べきではないだらうか。』

谷川氏は、種々の論點に觸れて、これを複雑化乃至混雑化してゐるが、論旨は要するにこゝに紹介したところに盡きてゐる。私は、仔細に氏の論據を考へて見ることにしよう。

三

氏の論據の最も重要な點は、變化的側面の指摘であるが、氏のあげてゐるやうな理由で、直ちにそれが設定されていゝものであらうか？

なるほど我々は「神曲」を讀んで、『高い魂の鳴り響く』と言つたすさまじい程度でないにしてもとにかく或る興奮を感じる。だが、その興奮は「神曲」のつくられた當時の人々のそれによつて與へられた興奮と、同じ程度のもの、又は同じ質のものであらうか？ またたとへば我々は、法隆寺の伽藍を見て、或る感に打たれるが、それはその伽藍のつくられた當時の人々がそれによつて與へられた感銘と、同じ程度、同じ質のものであらうか？ 決してそうでない。第一、我々はその中に、宗教的興奮などは、微塵もこれを感じないのである。谷川氏は『われ／＼の中には今も原始人の自然にたいする恐怖がある』と無雜作に言つてのけてゐるが、我々の自然にたいす



る恐怖と、原始人のそれとは、決して同一ではない。第一我々のその恐怖は、自然崇拜などをつくり出しては來ないではないか。『泉と緑蔭と牧場』との風景に美を感じ、不自然不合理と思はれる義理人情の柵に泣かされるといふ事實にしてもそうである。我々はギリシヤ人と同じ度合、同じ質の美を、そこに感ずるのではないし、封建末期人と同じ程度に、それに泣かされるのではない。

即ち同じ藝術でも、時代が移り、社會が異なるにしたがつて、その持つ美的價値は異つてゐる。そこには絶對的に言つて、何等不變的なものは存しないのである。これはカルヴァートンが『最新精神』に論斷してゐる通りである。

我々が、時代を異にし、社會を異にした藝術に、今もなほ打たれるといふ事實が、若し何事かを説明するとすれば、藝術の持つ全價値はこれを分解して見るとそのうちには、比較的早く變化する部分と、比較的遅く變化する部分とがある、と言ふ事實を語るに過ぎない。たとへばいまの法隆寺の例で言へば、當時の宗教的イデオロギ―を反映した部分は、比較的早く變化する部分であるが、その均齊や清楚やの美の部分は、比較的遅く變化する部分である。比較的遅いにしろ、とにかくそれは變化する。だからこの部分は、前の部分にたいして相對的にこそ、不變的と言へ



ば言へないことはないにしても、いかなる意味においても絶対的に不變的側面など言はれるものではないのである。

これは我々にとつては、餘りにも明白なことである。それだけ谷川氏的不變的側面と變化的側面との指摘は、餘りにももろい根據に立つものと考へざるを得ないのである。

しかし谷川氏の言ふ不變的側面が、實際不變的側面でないにしても、とにかく時代を異にし、社會を異にした藝術に、今日でも我々が打たれるといふ動かす可からざる事實は、これをどう解してよいか。その問題はまだ解決されずに残つてゐる。

そしてこの問題の解決こそ、直ちに谷川氏の普遍人間性の概念の検討となるものである。

#### 四

我々は、時代を異にし、社會を異にした藝術に、いまもなほ打たれる。だが、そこにも自ら區別がある。いかなる時代、いかなる社會の藝術でも、それが謂ゆる『偉大な』藝術であれば、いまもなほ我々はそれに打たれるといふ譯ではない。例へば、我々は現在、ドストエフスキーの藝術には打たれるが、シャトーブリヤンの藝術には打たれない。明治文學の例で言つても、露伴の



藝術には打たれるが、紅葉の藝術には打たれない。だが、これは我々のことで、我々の後に來る人は勿論、我々と同時代の人でも、我々と變るのは言ふまでもない。我々に反してこんどはシャトーブリヤンが喜ばれて、ドストエフスキーが斥けられ、紅葉が選びとられて、露伴がすてられるかも知れない。

これで見ても分る通り、我々が時代を異にし、社會を異にした藝術に、ある價值を感じるのは、我々のおかれた社會的條件からであつて、その社會的條件が異なるにしたがつて、そこに或る價值を感じる過去の藝術も異つて來るのである。

この場合、谷川氏のやうに、普遍人間性の要請をつくつて見たり、『かはらぬ人情』を持ち出して見たつて、何ものも證明しはしないのである。たとへば人々が『泉と綠蔭と牧場』との風景に美を感じなくなる時が來たら、歌舞伎の義理人情の柵に泣されなくなる時が來たら、どうであらう。しかもそう言ふ時は來ないと、谷川氏と雖も決して言へはしないであらう。その時には普遍人間性の要請も、『かはらぬ人情』も、何事をも説明しなくなりはしないであらうか。

谷川氏は、その普遍人間性の概念を展開さるために、マルクスの言葉を引用して、これをマルクス主義者に代つて説明してゐる。



マルクスは、『經濟學批判』の序論に於て『困難は、ギリシヤ藝術及び史詩が或る社會的發達状態と結びついてゐるのを理解することに起るのではない。困難は、それらが今も尙われ／＼に藝術的享樂を與へ、且つ或る點では規範として、又及び難い模範として通るのを「何と解するか」にある。』と言つてゐる。谷川氏の言ふやうに、これまでマルクス主義者は、この後の方の困難な問題を解くことを閑却してゐないまでも、それを回避してゐたことは、これを認めてもよいと思ふ。だが、我々は、それにつゞくマルクスの示唆的説明にたいする谷川氏の排撃には、承服することが出来ない。

マルクスは、その困難な問題に示唆的解釋を與へてかう言つてゐる。『大人は二度と子供には成れぬ——子供みたいに成りでもせねば。が、子供の純眞は彼を喜ばせ、彼は更にその眞實をヨリ高い平面に復生産しようと自ら努めないであらうか？ 少年性のうちにこそ、どの時代でも、それ自身の特性が自然的眞實において蘇りはせぬか？ 人類が最も麗しく展開されてゐる人類の社會的少年時代が、二度と還らぬ段階として、なぜ永遠の魅力を發揮してはならぬといふのか。育ちの悪い子供があり、早熟的な子供がある。古い民族にはこの範疇に屬するものが多い。ギリシヤ人は、順當な子供等であつた。彼等の藝術が吾々の上にもつ魅力は、それを生ひ立たせてゐる



未發達な社會段階と矛盾するものでない。魅力は寧ろ後者の結果であり、未成熟な社會的諸條件——その下にあの藝術が成り立ち、その下にのみ成り立ち得たところの——が、二度と再び歸らぬことゝ離れ難く結ばれてゐる。』

マルクスはこゝでどう言つてゐるのであらうか。ギリシヤの藝術が今日なほ我々に魅力を持つてゐるのは、それが未發達の社會發達段階の産物だといふ、正にそのためである。我々の時代の發達段階に達した社會は、最早や再び、その未發達の段階へ復歸することは出来ない。それは恰かも、大人が子供にかかるへことが出来ないと同様である。その故にこそ、ギリシヤの藝術、順當な子供の純眞が、我々に魅力を持つてゐるのである。即ち今日の段階に發展してゐる社會的條件が、我々をしてギリシヤの藝術に魅力を感じさせるのである。さればその魅力は、いかなる意味においても、ギリシヤの藝術そのまゝを、子供の眞實そのまゝを再生産するやうに、我々を誘ふものでなく『ヨリ高い平面に復生産しよう』と誘ふのである。

このマルクスの示唆的解釋を、谷川氏は『十九世紀初葉に於ける「古典的」と「浪漫的」との對立に於ける「古典的」の概念の把握の一面を一步も出でゐない。』と簡単に片づけてゐるが、我々には決してそうは考へられない。



これこそ、『社會意識は、社會的存在によつて決定される』ことの、一つの精敏な證明に外ならないのである。

五

谷川氏は『われ／＼はもつと廣い見地に立たなければならぬ』と、餘りに尤もな、それ故に無意味な宣言をした後に、曩に書きぬいたやうな文化傳統論、意識連續論を持ち出し、そこに普遍、人間性の要請を立てゝゐるのであるが、それはいかにも抽象的な唯心的な遣り方である。

『現在の中には常に過去がふくまれてゐる』こと、『一つの時代はそれに先行する時代を離れて考へられない』こと、従つて『文化の傳統において、われ／＼はいはゞ意識的連續を保持してゐる』こと、これ位、明白なことはないだらう。谷川氏の口吻によると、マルクス主義はこの『廣い見地』を忘却してゐるかのやうであるが、マルクス主義ほどそれを明白に把握してゐるものはない。たゞマルクス主義は、谷川氏の如き唯心論者と異つて、それを具體的に、現實的に把握してゐるのである。資本主義經濟は、封建經濟の辯證法的發展であり、資本主義經濟のうちにも、封建經濟は混入してゐる。マルクスは言ふに及ばず、およそマルクス主義者でこの時代的連繫、混在を否



定するものは一人もない。レーニンのロシア資本主義經濟の現實の解剖の最も輝かしい點は、その中に混在する各種の前資本主義的形態を直射的に指摘したところに在るのは、誰でも知つてゐる。既に社會の基礎的組織においてそうである。その『社會的意識が、社會的存在によつて決定される』以上、文化の傳統において、意識的連續の否定される理由があらうか？ 否、マルクス主義は、その意識連續を、こゝでも最も具體的に把握してゐる。

この時代的連繫、意識的連續から、どうして谷川氏のやうに『そこには變化的なるものゝうちに不變なものが見られ、不變的なものゝうちに變化的なものが見られる。』と、容易に推論し得るのであらうか？ 谷川氏に反してそこに見られるのは、變化的なものばかりである。凡てが變化する。たゞ、その變化に、經濟と意識とにおいて、遲速の差があるに過ぎない。

谷川氏の語調をかりて言へば、變化の早いものだけを見て變化の緩慢なものを見無いのは、ウソである。また變化が早く、差別が明白なものを見て、變化が緩慢であり、共通的な點のあるものを見ないのもウソである。しかもそれは、獨り過去に關してのみ言はれることではない。未來に關しても言はれる。我々の資本主義社會には、過去の封建經濟の殘存も立派に認められるが、未來の社會主義經濟の萌芽も存在する。したがつて過去の封建的意識も存在すれば、未來の社會



主義的意識も存在する。過去に關して言はれたことは、未來に關しても言ひ得られるのである。

そこにどうして、また谷川氏の曩の抽象的な前提からして、普遍人間性の要請などがたてられるのであらうか？『假定』とか『要請』とかとことわつたところで、決して救はれる譯はないのである。人間性とか、人間の理性とか言つた假定や要請は、いくらでもつくられる。たとへば進歩といふ事實を説明するために、人間の普遍前進性といふ假定や要請をつくつて見たつて、何等救はれるところのないのと一般である。

問題は意識の性質である。社會的意識は社會的存在で決定されるが、その意識が具體的にどう言ふ形をとつて來るか、意識それ自體の法則にしたがふのである。たとへばゴム鞠は一端はづみがついてからは、それ自身の運動の法則にしたがつてはづむが、そのゴム鞠が、傾斜面にぶつかるか、平面にぶつかるかは、その法則と何等の關係のないことで、ゴム鞠のはづみは、先づこれによつて決定されるのである。だからゴム鞠のはづみのそれ自體の法則、意識の發現のそれ自體の法則を知ること、それによつて、その限りの現象を説明することは毫も差支へないが、それで具體的のゴム鞠のはづみや意識の發現が説明しつくされると思つたら間違ひである。

マルクスはこの意識の發現について、『社會的存在によつて決定される社會的意識』の發現につ



いて、その歴史批判的諸著作において、極めて見事な描寫を與へ、意識とは具體的に、そう發現するものだと説明してゐる。その輝かしい一例として『ルイ・ボナパルトのブルユメール十八日』中に著名な個所を引用しておかう。

『……あらゆる死んだ時代の傳統は、生きてゐるものゝ頭腦の上に、惡魔の如くにのし掛る。人間が自己と事物とを變革して、未だかつて無かつたものゝ創造に従事してゐるかの如く見える、まさに革命的危機の時期に當つてさへも、彼らは何とかして、その御用を勤めさせるために過去の靈魂を呼び起し、その名前と、その関の聲と、その衣裳とを借らうとする。かうしてこの時代のついた衣裳と借りものゝ文句とによつて、世界歴史の新しい場面を舞臺に上ぼそうとするのである。かやうにルーテルは、使徒ポーロに扮裝し、一七八九年—一八一四年の革命は、代はるがはる、ローマ共和國と、ローマ帝國との衣裳を着け、そして一八四八年の革命は、或る時には、一七八九年の、或時には一七九三年—一七九五年の革命的傳説を焼き直ほすこと以上には、何ら出ることが出来なかつた。同じやうに、新らしい國語を學びかけた初學者はたえず、その言葉を自國語に引き直ほしてみても、初めて意味を取るものであるが、自國語を思ひ出さないで操つれるやうになり、親譲りの言葉を忘れてゐられるやうになつて、初めて新しい國語の精神をわがものとし



て自由にこの國語で思想を言ひ表はし得るやうになる。』

意識は、實際にかう言ふ仕方——これはホンの一つの場合だが——發現するものである。この發現の態様だけを見て、この例で言へば、ブルジョア革命が、前代の革命的傳統を意識に生かしたと言ふ様相だけを見て、普遍人間性の要請などをつくつて見たところと、何ものをも説明しはしないのである。

意識の説明は部分的には意識の範圍でつくが、それが十分な説明は、意識の範圍ではつかない。そこに何とか無理をしようとするれば、何等かの假定を設けたり、要請をかまへたりしなければならぬ。が、およそいかなる現象でも、假定や要請を設けてなら、説明出來ないものはないであらう。と言ふのは、その假定や要請のうちに、既に説明がかくされてゐるのだからである。

谷川氏の普遍人間性の要請は、それだからその中に不變の美的價值が、あらかじめかくされてゐるのである。それは、現象の説明でもなければ、問題の解決でもあり得ないのである。我々は、決して萬有神性の假定とそこから引出された物神の説明をもつて、自然現象の説明とも見なければ解決とも見ないからである。



## 六

谷川氏のマルクス主義文學理論の基礎的見地にたいする非難は、爾く唯心的な、薄弱な基礎に立つてゐる。

その上、藝術は、與へられた社會階級の努力及び氣分を表現する、といふ見地、その見地から出發した藝術の取扱は、せい／＼解釋學的、歴史批評的な範圍を出でないとする氏の見方は、目的論と必然論とに關する舊い新カント派の見方を一步を出づるものではない。これについては、こゝで説明してゐる暇がないから、いづれ稿を改めて説く機會があるであらう。

マルクス主義的藝術の全藝術價值から、狭い意味の藝術的價值を遊離して來る以上、そしてその遊離された藝術的價值の本質を、必然にそれだけとして説明しなければならぬ以上、永久不變の美的精神とか、普遍的人間性とか、或はかつて自然主義文學者が不器用にやつたやうに單に人間性とか、そう言つたものを主觀的に、形而上學的に擔ぎ出して來なければ、その説明は決して徹底しない。谷川氏は、その常道を踏んだに過ぎないのである。谷川氏の藝術理論は、だからブルジョア美學の正統の子、それもずゐぶみすぼらしい——粗野な言葉をつかふのを許してもら



へば——子だと言つていゝのである。

私は最後にレーニンにならつて言ひ添えておかう。マルクス主義的唯物的文學理論はまだ弱いとは言へ、ブルジョアの唯心的文學理論を打ちやぶる程度には十分に強くあると。(四年六月)



## マルクス主義文學の誤導

上

平林初之輔君は『新潮』三月號の『政治的價值と藝術的價值』において、その傍題に示されてゐる通り、『マルクス主義文學理論の再吟味』を大膽に試みてゐる。私はいまこの問題的な一文の中心論點について、批判して見ようと思ふ。何ゆゑ特に中心論點と斷るかといふに、この短い一文には種々様々な問題が取扱はれてゐる。否、簡単に觸れられてゐる。それを一々取上げて、平林君に説明を求めたり反對の解釋を述べたりしてゐたら、際限がないからである。尤もこれらの種々様々な問題も、それ〴〵重要なものなので、他の機會に論評して見たいとは考へてゐる。

この論文の中心論點をザツト説明するとかうである。プロレタリア文學においては、プロレタリアの當面の政治的的目的に貢獻するといふ政治的價值が主であつて、藝術的價值は従である。マルクス主義文學乃至批評のマルクス主義文學乃至批評たるゆゑんは、その政治的基準の優越を執



つて動かぬ點にあるのであり、政治的文學、政治的批評たる點にあるのである。政治的價值と藝術的價值とは二元的な『遂に調和し得ない』ものであつて、『マルクス主義文學理論は兩者の統一ではなくて、政治的價值に藝術的價值を從屬せしめ、これをそのヘゲモニーのもとに置かんとするものである。』——すなはち平林君は、この小論文において、政治的價值を藝術價值にハツキリと對立させ、マルクス主義文學の特質は、藝術的價值が政治的價值に從屬せしめられるところに存するとなし、これによつてマルクス主義文學理論の『矛盾』を救はふとしてゐるのである。

私は先づ平林君に問ひ度い。プロレタリア文學の價值が、プロレタリアの政治的要求に貢獻する度合によつて決定されねばならぬことは、今更平林君の聲張り上げての宣明を待つまでもなく、わがプロレタリア評論界ですでに唱へられてゐることであり——私の『目的意識論』もその直接の闡明であつた。ロシアでは、早くすでに一九〇五年にレーニンが唱へてゐるところである。即ちレーニンは、その時すでにハツキリと『文學の仕事は……單一にして偉大な社會民主主義といふ機械的組織の一つの車輪であり、ネヂでなければならぬ』といつてゐる。だが、このことは平林君のやうに機械的に政治的價值と藝術的價值とを分離して、一つを他に從屬せしめることを要求するものであらうか？



問題はプロレタリア文學作品であつて、プロレタリアの政治的要求に答へた論文でもなければ、研究文でもない。プロレタリア文學作品が『プロレタリアの勝利に貢献する』ためには、その『一つの車輪であり、ネヂである』ためには、プロレタリア・イデオロギーが藝術の言葉によつて、プレハーノフの用語をかりれば、形象の言葉によつて語られてゐなければならぬ。それが藝術の言葉、形象の言葉によつて立派に語られて、始めて『プロレタリアの勝利に貢献し得』るし、その『一つの車輪であり、ネヂである』ことが出来るのである。強ひて藝術的價值、政治的價值といふ言葉を用ひるならば、プロレタリア文學作品には、藝術的價值の無い政治的價值は考へられないし、政治的價值の無い藝術的價值も考へられない。それはプロレタリア作品の持つ全一な價值——統一的の價值——の二面に過ぎないのである。

これを實踐的に見て、平林君の機械的從屬論の結果はどうなるのであらうか？ いはゆる尖鋭なプロレタリア・イデオロギーを抽象的に羅列したやうなものが『政治的價值』の優越を名として、プロレタリア藝術の價值表の上位におかれるといふノンセンスが生れるのである。

## 中



プロレタリア文學はプロレタリアの政治的要求に貢献しなければならぬといふこと、それがプロレタリア運動の一つの車輪、一つのネヂとならねばならぬといふことは、プロレタリア作品の不可分の統一的價值についてのみいひ得られることであつて、その一面についていひ得られることではないのである。

平林君はこの論文で、政治と藝術といふ言葉を對立させ、強ひて内容と形式といふ言葉を避けてゐる。だが平林君のいふ政治的價值はこれを内容的價值といつても差支ないやうであるし、藝術的價值はこれを形式的價值といつても差支ないやうである。これが果して差支ないとすれば、問題は内容と形式に歸つて來て、よほど單純化される。

藝術における内容と形式は、不可分に結ばれてゐるものであつて、これを切離して從屬關係におくことは、すべての藝術論におけると同様、マルクス主義藝術論においても許されることではない。文學の形式は、勿論、その作者を驅つてその文學を創らしめたところの内容に依存し、それによつて決定される。だが、それは内容と形式の對立、二元的關係を意味するものではない。形式は、その内容の内的必然の力によつて生み出されるのであり、その意味において内容に依存し、それに決定されるといはれるのである。



この内容と形式の關係は、マルクス主義文學におけると、ブルジョアジエの文學におけると、少しの差異もないのである。マルクス主義文學はプロレタリア・イデオロギーを内容とし、その内的必然の生んだ形式を持つ文學——現在のプロレタリア文學が、その形式を完全に生み出してゐるか否かは別個の問題だ——であり、ブルジョア文學は、ブルジョア・イデオロギーを内容とし、その内的必然の生んだ形式を持つ文學である。この二つの階級の二つの文學の根本的の相違は、そこにあるのであつて、その一つにおいては形式が内容に従屬し、他においては内容が形式に従屬する等々の機械的相違にあるのではない。

勿論今日、プロレタリア文學においては、内容が重んぜられ、ブルジョアジエの文學においては形式が重んぜられてゐるのは、まぎれもない事實である。だがこれは、その文學をつくる階級の歴史性によつて然らしめられるのであつて、内容と形式の二元性を實證するものではない。プロレタリア階級は今や階級としての生長期にあり、その内的必然の力によつて形式の生み出される前に、先づ内容の充實が熱求されるからであり、ブルジョア階級は今や階級としての崩壊期にあり、内容の充實が要求されることなく、ひとへに過去につくり出され完成された形式の保存に心を占められてゐるからである。プロレツト・クルトの文學論は、正當に説明して曰く、『或一つ



の文化の勃興期には内容が尊重され、満開期には内容と形式が調和し、崩壊期には形式が過重される』と。

## 下

これで平林君の政治的價值と藝術的價值との切離し——次いで後者の前者への從屬化の間違ひであることが、ほど説明されたと思ふ。平林君は、この機械的分離が現在のプロレタリア文學理論の『矛盾』を救ふ道だとしてゐるが、私はこれこそ現在プロレタリア文學理論と作品とを迷路に導くのもだと考へる。

現在日本のプロレタリア文學は、漸く過去の内容尊重の一面性を脱却して、その内容の内的必然の力によつて独自の形式を生み出さうと、藻掻いてゐる。プロレタリア文學運動内の諸々の理論的努力は、この藻掻きの現れに外ならない。これを外の言葉でいへば、プロレタリア文學がますます／＼プロレタリア文學に成らうとしてゐるのである。この時に當つて、内容と形式、政治的價值と藝術的價值の二元説を唱へて、兩在の關係を機械化することは、右の正しい藻掻き——努力を枯死させる効果しか持ち得ないであらう。



最後に私の非常に遺憾と考へるのは、平林君がこの論文中で、いはゆる政治的價值にはこゝに關する限りハツキリした説明を與へてゐるが、いはゆる藝術的價值については、さつぱり説明してをらぬことである。もし平林君自身、それをハツキリと説明しようとなつたら、或はかういふ誤れる機械論は出て來なかつたかも知れない。

平林君はそれまで盛んに問題にして來た藝術的價值といふ言葉について、『これを私は神秘的な、先驗的なものだとは解してゐない。それは社會的に決定されたものだと思つてゐる。たゞマルクス主義イデオロギーや、政治闘争と直接の關係をもたぬと思つてゐる。』とアツサリ説明して澄ましてゐる。これでは平林君の『懷疑的態度』も案外心細いと思ふ。

藝術的價值は、社會的に決定されたものである。それは私もさうであると思ふ。ところでマルクス主義イデオロギーや政治闘争は、『社會的』な事象ではないであらうか？ それが社會的なしかも階級に深く根ざした事象であることは、平林君も否定しないであらう。さうだとすると、藝術的價值はそれによつて、直接的にしる間接的にしる、決定される譯ではないか？ それをたゞ『直接の關係をもたぬと思ふ』では、餘りに手つ取り早きに過ぎる氣がする。私は平林君に反して、プロレタリアの抱く藝術的感覚、従つて藝術評價は、プロレタリア・イデオロギーや政



治的闘争によつて育成され、決定されると信ずる。それでなければプロレタリア文學の發達はな  
いであらう。

これだけで見てもわかるが、平林君の『マルクス主義文學理論の再吟味』は、實際再吟味であ  
るにしても、かなり粗略な再吟味であり、抽象的な、獨立した藝術的價値を高調してゐる點から  
見ると、藝術至上主義への君自身の退却のための『再吟味』ではないかと疑はしめるものがある。

(四年三月)



## 科學としての批評について

—

私はこの約一年、ほとんど文藝批評といふものの筆を斷つてゐたと言つてよい。これは一つには私の性來の怠慢からも來てゐるが、意識的に當分書くまじとした結果でもあつた。而してこの意識的怠慢はいまでも續いてゐるのである。その意識的怠慢の原因は何であるか？ それはやがて明瞭となる時があるであらう。

この一文はその怠慢から立つて何等か積極的な主張を敢てしようとするものではない。近來の文藝批評について日頃考へてゐることから出發して、文藝批評の若干根本的な問題に觸れて見ようとするに止まる。

文藝批評は、いま極度の不振な状態にあると言はれる。この状態を無批評時代と名づけた機智的な批評家もあつたやうである。だが表見からすると、必ずしも無批評時代でもないらしい。大

科學としての批評について



に脂がのつて「私的」批評の筆を振るつてゐる老作家もあれば、創作の筆を休めて、文藝時評に不斷の努力を見せてゐる中堅作家もある。そしてそれらの批評は、尠くとも文壇の或部分には、共感をもつて迎へられてゐるやうである。

だがそれがあるにも拘らず、右の機智的な批評家をして無批評時代と印象せしめ、一般をして極度の不振状態と思はしめる原因は何であるか？ そこには相當に根柢の深いものがなければならぬ。作家の批評でなく、謂ゆる批評家の批評がないからとか、緊張した論争がないからとか言つた淺薄な原因では、勿論無い。

實は、いまの文壇には印象批評的な、即興的な、言はず詩的な批評は相當にあるのである。文壇の一部に共感を見出してゐる正宗氏の批評などが、その代表的なものと言つてよいであらう。かうした詩的な批評が十分に満足を與へないで、やはり無批評時代の嘆を發せしめる所以は、さういふ詩的でない、科學としての批評がないからではないかと、私は考へる。

科學としての批評とは何か？ それはこゝに取扱はないとして、かう言ふ言ひ表し方をすると、すぐ文藝批評は科學ではない、一個の批評的創作である、と論難されるであらう。わが國の文壇の傳統からすると、科學としての批評などと言ふ標語は、餘りにも無内容に聞えるのが自然であ



る。だが、批評は詩や、一個の創作ではなくて、一個の科學である。科學としての批評が、今や、人々の心に、或は無意識的に、或はかすかに意識されて、要求されて居り、しかもその要求が幾分でも満されないと、どれほど多くの詩的批評があり、あり餘るほどの即興的批評があつても、批評の振興として満足されないのではないかと思ふ。

## 二

私は、最近、アメリカのプロレタリア批評家カルヴァートの評論集「新々精神」を讀んで、科學としての批評に論及してゐる個所に遭着して、私が漠然と考へてゐたことに、わづかな程度ではあるが或發展を與へられたことを喜んだ。(尤も、この評論集は著名である割合に、内容が平凡乃至空疎である。文學的イデオロギーの社會的基礎を、啓發的に説く點では相當に力が籠つてゐるけれども、殆どそれ以上に出てゐない。科學としての批評の見本として提出した觀のあるシヤールウッド・アンダーソン論でも、多少教へられはするが、我々に十分な満足を與へない。)

批評は詩乃至創作であるか、それとも一個の科學であるか？ カルヴァートは、批評をもつて一個の創造的藝術であるとする。メンケンの批評理論を檢討して、だいたい次のやうに論じて

科學としての批評について



ゐる。

メンケンにとつては、批評は一個の創造的藝術であり、悲劇や敘情詩と同じに生々とした藝術的精神の表現である。批評は一個の美術であり、これ以外の何ものでもない、批評をして科學たらしめる一切の重苦しい努力を忘れよ、と彼は言ふ。尤も論理上のこの過誤を犯してゐる批評家はひとりメンケンのみでなく、他にも澤山ある。だがこれは批評の目的を全く誤認してゐるものである。これは横着をかまへて、批評の定義を回避するところから生ずるのである。藝術の第一に且つ直接に訴へかけるものは、理知的反動でなく感情的反動から生ずる情緒である。理知は、諸觀念の比較、諸原因及び諸屬性の分析解剖、價值の評価、變化の豫斷を取扱ふ。理知のかういふ諸活動も、内臟的諸變化の影響を受け得るには相違ないけれども、それにも拘らずそういふ活動は、觀念的であつて、感情的ではない。一個の小説を書く場合、我々は感情を目醒まさうと努力し、人生についての一種の直觀的理解を創造しようとするのであつて、一個の論理的目的論、數の連續理論又は諸科學の數學的綜合を提出しようとするのではない。藝術が科學と異なる所以は、その訴へ方と方法にあるのである。



スピニング派やメンケン派の人々の抗議にも拘らず、やはり批評は一個の科學であつて、一個の藝術ではない。尤もかう言つたからとて、批評は例へば物理學のやうなハツキリした科學であるとか又は何等か疑ふことの出来ない法則乃至一般化を樹立してゐるものであるとか、そんなことを我々は主張するものではない。批評の方法は科學の方法であつて、藝術の方法ではない、と我々は主張するのである。——批評が一個の創造的藝術とならうとする時、それは批評の目的を無効にしてしまひ、批評であることを失つてしまふ。批評は、さまざまな仕方やさまざまな内容から成つてゐる。それは、検討し、比較し、測定し、判断しようとする。批評の目的は、本來、告白的興奮、空想のひらめき、又はゴシップの寄せ集めをもつて來て、讀者に御馳走をしようとするのでなく、解剖し、評價しようとするのである。その目的は一個の藝術作品を創造することにあるのでなく、一個の解剖の——論理の——作物を創り出さうとするのである。

カルヴァアートのこの論述は、批評をもつて創造的藝術ではなく、一個の科學であるとハツキリ言ひ表した點で、傑出してゐるものである。へたとへその説明は大まかであり、多少の矛盾があ

科學としての批評について



つたとしても。またこゝに略述した個所にも、この著書全體においても、その科學的方法について、具體的、統一的な説明を與へてゐないにしても。またそれをハツキリと言つて除けた點において、それは我々の漠然と考へてゐたものに、わづかではあるが、發展を與へてくれるものである。

ついでだから書き添へておくがカルヴァートンは、批評の目的は本來、告白的興奮、空想のひらめき、又はゴシツプの寄せ集めをもつて讀者に御馳走しようとするのではない、と言つてゐる。これは一種の皮肉であらう。そしてこの皮肉は、わが文壇の多くの批評にたいしても皮肉としての響きを持つものではないか、と思ふ。今日のわが文壇の多くの批評は、或創作なり、或作家なり、或文學現象なりを機縁として、評者の告白的興奮で埋めたり、空想のひらめきで色どつたり、ゴシツプの寄せ集めで済ましてしまつたりしてゐる。しかもその傾向が、日を追つてますます強く強くなると言つてよいであらう。

## 四

たとへば顯著な例をとつて見ると、先頃の芥川龍之介氏の死、最近の葛西善藏氏の病歿に際し



て現れた數限りのない批評が、最もよくそれを證してゐるであらう。尤もそつういふ人の藝術の全體としての本統の批評は、その死の直後の興奮状態の中からでなく、將來に期すべきものであると言はれるでもあらう。だが、それと共に、そつういふ本統の批評は、それらの告白興奮批評家、空想發散的批評家、ゴシップ問屋的批評家の手によつては、遂に生れないとも言ひ得られるであらう。

それはそれとして、私の乏しい見聞の範圍では、これまでわが文壇には、曾て批評理論が力強く提出されたことは無かつたやうである。批評は創作であるか、科學であるか？ 尠くともかう言ふ明確な決定的な形をとつて、提出されたことはなかつたやうに思ふ。私は曩に、わが文壇の傳統を云々したが、その傳統を色濃く染めてゐるものは、アーサー・サイモンズの批評であり、ウォルター・ペーターの批評であつて、科學的方法の或る意味の先驅たるブランドスやテーヌの批評でさへもが、甚だヨリ尠くしか影響してゐないやうである。したがつて、批評理論が力強く提出されなかつたのが、寧ろ自然であると言つてよいであらう。

かう云ふわが文壇の批評の傳統にたいして、反抗して立ち、乃至は反抗して立たうとしたものは、プロレタリア批評である。そしてプロレタリア批評は、明らかに、詩としての、創造的藝術



としての批評に對立して、科學としての批評を指標して立つたものである。だが、プロレタリア批評もまた曾て、右のやうな明確な形をとつて、批評理論を提出したことは無かつたと思ふ。

かく明確な形において批評理論を提出しなかつたと言ふことは、プロレタリア批評家の意識的準備において、それが十分に把握されてゐなかつた證左でもあらう。そのことはまた、近來わがプロレタリア批評が、漸次にその指標を離反して、詩的、創作的批評に没落しつゝあるのを見ても分かると思ふ。

科學としての批評の内容、批評科學の方法について多少觸れて見たかつたが、豫定の紙數に達したので擱筆する。(三年九月)



## 文藝批評が進展するため

上

文藝批評が非常に振はないが、どう言ふ文藝批評が出ればいゝのであらうか、これからの文藝批評はどうあるべきものなのであらうか？　これが、いま私に與へられた問題である。

文藝批評一般に關聯して積極的に、これからの文藝批評はかうなければならぬ、これ／＼の道に向つて進むべきだ、と言つた答案を書くことは困難である。尠くとも現在の私にとつては困難以上である。だが現在のプロレタリア文藝批評にたいしては、多少積極的に主張したいことを持合せてゐる。そこで今日の文藝批評一般については、若干の不満を指摘してそれで私の求むるものを斷片的に示唆しておき、プロレタリア批評についてはその主張を概説して見ることにする。現在の所謂文藝批評で、いちばん私の不満に思ふのは、一、それが餘りに部分批評であり過ぎることである。技巧のことを問題にすれば、その部分だけしか目をつけない。一作品の味と言つた

文藝批判が進展するため



ものを問題にすれば、その部分でお終ひになる。所謂内容を問題にするとその部分で終結して仕舞ふと言つた風である。文藝批評が不振だと言ふが、この部分批評では、現在も決してつまらないものばかりではない。相當に面白いもの、教へられるものがある。不満はほとんど凡てが部分批評であつて、その部分を全體との聯關に於て取扱つた批評、部分を結合した全體的な批評のない點にある。これが、文藝批評界に雑音ばかりがあつて大きな響き渡る聲がない、と言つた印象を與へ、また事實に於てさうである一原因ではないかと思ふ。(これまでの私の書いて來た若干の文藝批評も、要するにその部分批評であつたことを認める。たゞ私の取扱つた部分は、全然文壇的に閑却されてゐた部分だつたので、啓蒙的な必要が止むなく私をさうさせたのもあることを言ひ添へておく。)

二、いまの文藝批評は取扱ふ範圍が、全然作品の範圍に限られた所謂作品批評か、作家の個人を範圍とした作家論かに止まつてゐる。この種の批評のあつて然るべきことは言ふまでもない。だが、文藝批評が、その種の批評だけになつて仕舞つては仕方がない。個々の作品や個々の作家を材料(少し言葉が妥當でないが)として、批評家の思想なり、世界觀なりを具體的に展開した種類の文藝批評が、あつて然るべきであり、さう言ふ批評が出て初めて、文藝批評が文壇を越え



て社會に高く響くのではないかと思ふ。

高山樗牛の批評や、北村透谷のそれには、この種類のものがあり、その爲めに文明批評と言ふ、ヨリ廣汎な名稱さへ與へられた。私の要求するものは、簡単に言へば展開された、擴大された文藝批評とでも言つた方が一層妥當である。文明批評などと言ふ言葉は、ジャーナリスティックで、内容が曖昧である。(新着の「新潮」を見ると、大宅君が「現象批評以上のもの」を要求してゐる。現象批評といふ言葉の内容が餘りハッキリしないが、それが部分批評のことであり、「以上のもの」のなかに、この擴大された文藝批評も含まれるならば、私は同感である。)

## 中

第三には、文藝批評の取扱ふ材料の範圍の問題である。今日の文藝批評は、その名にこだわつてゐる譯でもあるまいが、極く皮相な文壇現象か、或は月々の作品行動の範圍を、その取扱ふ材料の全範圍としてゐるかの觀がある。過般正宗白鳥氏が、封建時代や明治時代の文學を取扱つたやうにさう言ふ時代のものを、もう一度新しい眼で觀直すことも勿論いゝし、更に廣い意味の文學現象、例へば文學が働きかける生活上の問題を取上げることも必要である。「文學は單に生活の

文藝批判が進展するため



認識方法たるに止まらずして、同時に生活に働きかける極めて有力な手段である。』(マイスキー)ことは勿論であつて、従つて生活の認識方法としての文學が立派に文藝批評の對象となると同様に、生活の創造方法としての文學も、立派に文藝批評の對象となる筈である。それなのに後者を對象とした文學批評は、いまの文壇に殆んどこれを見ることが出来ない。プロレタリア文學批評の一つの貢献は、この缺陷を多かれ少かれ満たした點にあると言つてよい。が、それもまだ極めて不十分であり、未熟であつたことは、到底否むことが出来ない。

また例へば大衆文藝とか通俗小説とか言つたものは、今日の文藝批評の對象とはなつてゐないと言つてよいであらう。これも間違つたことである。所謂純文藝が批評の對象となるならば、一層廣汎な讀者に訴へ、一層廣汎な社會的作用をもつてゐる大衆文藝や通俗文藝が、批評の對象とならぬ理由はないのである。文藝批評が、文藝の作用する生活上の批評にまで展開すれば、當然、大衆文藝や通俗小説が問題の前景に歩み出なければならぬ。

第四、之までの論點と多少重複するかも知れぬが、今日の文藝批評のポイントのおき所の問題である。勿論、一概には言はれないが、いまの批評は、凡てが餘りに作家中心、人間中心であり過ぎはしないかと思ふ。一人の作家、一つの作品を一つの文壇的社會的の流れの中に溶解させて、



その流れに浮んだ、乃至はその流れを構成する一つの要素として取扱ひ、そのそれ／＼の交錯屈折の姿をも掴み出して見せる批評が、これも殆ど無いと言つてよい。たゞ最近、客観批評と言ふやうなことが説かれてこの缺陷を幾分満たすかに観えるが、其客観批評と言ふ規準がやはり曖昧で、したがつて目に立つた結果が收められてゐないやうである。

文壇やそれを取巻く社會の皮相な興味が、作家個人に向ふのは自然であつて、これをどうかう言ふのではないが、文藝批評がやはりその皮相な興味に媚びて、凡てが作家中心に陥つてはよくないと思ふ。作家の意識自體よりは、その作家を動かす流れ、その作家を押し出す力が、一つの大切な問題である。その把握、解剖が文藝批評に大切な仕事の一つである。

今日の文藝批評一般については私はだいたいかう云つた不満を持つてゐる。さうしてこの不満が、幾分でも満たされれば、文藝批評不振の印象は、よほど薄らぐと考へてゐる。

たゞしかしこゝに述べたことは今日の批評にたいする不満の列擧だけであつて、それならばさう言ふ文藝批評の部分化、局限性、追隨性はどこから來たかと言ふ根本の問題、それにたいする根本の解剖は、こゝで問題としたのではない。



下

プロレタリア批評の進むべき路については、『文藝戦線』の五月號に示唆的に述べておいた。そこでこゝではそれを少し擴充しておくにとどめる。

いま説明の便宜のためにレオン・トロツキーの言葉をかりて來やう。藝術家と讀者とを結びつける橋渡しとなるものは共通普遍的なものであり、その共通普遍的なものを通して、一人の藝術家の持つてゐる『繰返し得ないもの』に接するのであるが、『その共通普遍的なものは、一個人の許にあつて、その魂を形成してゐるところの、遙かに深い抗すべからざる諸條件——教育、生存、勤勞、交際などの社會的諸條件によつて決定されるのである。社會的諸條件は、歴史的人間社會にあつては、それは何よりも先づ、階級的屬性の諸條件である。イデオロギーのあらゆる範圍に亘る階級的規準が、わけでも藝術において、特に藝術においてさへも、あれほど豊富である理由はこゝに存するのである。何となればそれは屢々遙かに深い、隠された社會的暗示を現はすからである』『最も洗練された藝術的蒸溜液の中にも、社會的本質を發見することが出來、その理解を缺くと、藝術の批評も、藝術の歴史も宙にぶらさがるのである。』



この『最も洗練された藝術的蒸溜液の中にも』發見される社會的本質、階級的屬性の諸條件を、高々と揭示し、その所在を闡明することが、今日までの日本のプロレタリア批評の主たる任務であつたと言つてよいであらう。勿論、プロレタリア批評が始めて文壇に現はれてから今日まで、取扱はれ接觸された問題はそれだけではないが、その多くは、展開を今後を期すべきものであつて、今日までの努力の主要方向は、やはり、右の闡明乃至啓蒙にあつたと言つてよいであらう。これは、曩にも一寸言及したやうに、それが不當に閑却された一方面であり、且つプロレタリアの藝術の存在權を確立する上の一つ必要事だつたからである。

だが、プロレタリア批評のこの段階はすでに過ぎ去つた、今日では新しい主要努力の方向を決定すべき時である、と私は考へる。プロレタリアの批評が、藝術一般における階級性の指摘、與へられた文學作品、文學潮流の社會的範疇の決定を仕事とすることは、必ずしも今日と雖も、全然過去の仕事となつたわけではないが、その仕事にしてからが、これからは一層具體的に藝術にたいする潛入的な組織的な準備の下になされなければならぬし、またそれでなければプロレタリアの文藝の質的發展にたいして、批評が一つの積極的な力となることは出來ない。

こゝでまたレオン・トロツキーの言葉をかりて來やう。『個性とは血統的なもの、民族的なもの、

文藝批判が進展するため



階級的なもの、時間的なもの、生活的なものとの結合である。即ち個性の獨自性のうちに、精神の化學的混合の割合のうちに、個性は表現されるのである。批評の最も重大な問題の一つは、藝術家の個性（即ちその藝術）を構成要素に解剖しそれらの相互關係を發見することである。』

これからの日本のプロレタリア批評の、尠くとも、作品行動に關する範圍もこの解剖の基礎に立つたものでなければならぬ。それがブルジョアジエの作品の場合であらうと、プロレタリアートの作品の場合であらうと、同じことである。この基礎に立つて、プロレタリア批評をして眞に、パーシユエーシーヴ・パアーのあるものにもまで高めること、これが今後のこの方面での、主要努力の方向でなければならぬ。（三年五月）



## 外在批評への一寄與

レーニンのトルストイ評について

私はかつて文藝にたいする外在批評の必要を提唱したことがある。その意味は、これまでのやうに、文藝を單に文藝だけの範圍に限つて、その内部からの内在的批評では、當の文藝の持つところの、社會的、歴史的、したがつて人類的意義は決定されない、一度びその内在的價値を檢討して後には、その外に在つて、それを廣汎な社會的見地から批評しなければならぬ、而していまやそのやうな批評が要求せられてゐる、と言ふのであつた。

爾來、私はこれと言ふ結果は上らないにしても、文藝の外在批評のために多少の努力をして居る。また廣く文壇——専らプロレタリア文壇——にも、私と同じ志向の下に、外在的の批評を試みてゐる人々も、全く無いではないやうである。



私はこゝにエヌ・レーニンのトルストイ觀を解剖して、私たちの文藝の外在批評への一つのよき参考とし度いと思ふ。ロシア及び世界の劃時代的の社會理論家であり、革命實踐家であるレーニンが、十九世紀末のロシア及び世界の大家藝術家をどう觀察し、批評をしたか？ 私たちがそこに文藝の内在批評でなく、頭から外在批評を豫期してよいことは、改めて説明するまでもないであらう。

レーニンのトルストイ觀は、トルストイの八十才の誕生祝ひの時ロシアの社會民主々義の新聞紙「プロレタリア」(第三十五號、一九〇八年九月十一日)に掲げられたもので、最近日本でも二三種の反譯が出てゐるが、私はこゝでは佐野學氏譯の小冊子「宗教について」の中に納められたものをテキストとして用ゆる(因にトルストイは一九一〇年十一月七日八十一才で死んだ)。

レーニンは先づかう云つてゐる。「ロシアの合法新聞はトルストイの八十才の誕生日に論文や書翰や覺書の類を満載してゐるが、ロシア革命の性質及び推進力といふ見地から彼の著作を分析してゐるものは殆どない」と。これで見ても分る通りレーニンは、トルストイをその藝術的内在價値の見地から見ようとするのではなく、また漠然たる人生的見地から見ようとするのではなく、或はまた道德的立場から批評しようとするのではない。實に、「ロシア革命の性質及び推進力とい



「ふ見地」からトルストイの藝術及び行爲の全體を批評しようとするのである。この論文が書かれた一九〇八年は、かのロシアの第一次革命（一九〇五年）の終つて三年後で、一九一七年のプロレタリア革命に先立つ約十年である。この時に「ロシア革命」を云々するのは一見奇異であるが、ロシア革命は一九一七年十一月に一つの大きな辯證的飛躍をしただけであつて、その辯證的展開の過程は、長き年月に亘るものである。即ち「ロシア革命」は一九〇八年においても勿論一つの社會的事實であり、重要な社會的重心だつたのである。この社會的重心の性質及び推進力の見地から、レーニンはトルストイを觀察しようとするのである。私たちの文藝の外在批評にとつて、このトルストイ觀が重要なものであるのは、こゝにその理由を持つてゐる。

文藝の外在批評も、その初段的準備として當然に内在批評を持たなければならぬ。これは私の外在批評にもはつきりと書き記しておいた處である。（當時、ブルジョア批評家等は私を目して、内在批評を無視するものとして、いかに無意味に惡罵したことよ！）それならばレーニンは、藝術家としてのトルストイの全貢獻をどう觀たか？ 彼は言ふ。トルストイは「天才的な藝術家であり、ロシア生活の無比の形像のみならず、世界文學の第一流の著作を提供してゐる。」と。また言ふ「トルストイは、彼がロシアにおけるブルジョア革命の爆發の時代に、ロシアの農民の莫



大な大衆の把持した思想や氣持を表現する限りにおいて、偉大である。」と。トルストイの全藝術が「ロシア生活の無比の形像」であること、また彼の全藝術が「ロシア農民の莫大な大衆の把持した思想や氣持」の偉大な表現であることは、ブルジョアジーの一切の文藝批評家が禮讚渴仰をもつて説くところである。これに誤りはない。レーニンもまた「偉大」の文字を使つて、それを十分以上に認めてゐる。だがレーニンはそれを専ら禮讚渴仰して、そこに何等かの人生的意義を見出すことにとどまつてゐる俗物的感傷家ではない——少し對照が妙だが「深刻」なる正宗白鳥氏の例へばダンテや透谷の批評の、いかに俗物的感傷家のそれであるかを見よ。——

レーニンはトルストイの全所産即ちトルストイ主義のなかに、直に「莫大な矛盾」を見ることを忘れない。彼の外在批評はこの契機をつかんで、物凄く展開するのである。

二

そこに把握されたトルストイの「矛盾」とは何であるか？

トルストイは、一方には、ロシア生活の無比の形像を描いた天才的な藝術家であるが、——  
他方には「地主であり、キリスト信者の痴人である。」



また、彼は、一方には「社會の虚偽と無恥とにたいする如何にも激しき、突き込んだ、誠實な抗議をしてゐるが」——

他方には「ロシア・インテリゲンチヤと呼ばれる、氣力廢頹したヒステリーの泣虫」の一人である。

一方には「資本主義的搾取を忌憚なく批判し、政府の暴行や裁判や行政の喜劇の假面を剥ぎ、富と文明の成果との増大と勞働大衆の貧困、野獸化、苦痛の増大との間の矛盾の最も深刻な根據を暴露してゐるが」——

他方には「惡に抗するに暴力を以てする勿れといふ愚劣な説教」をして居り、——  
一方には「最も醒めたる現實主義を以てありとあらゆる假面を剥ぎとるのであるが」——

他方には「世界中での最も卑しい事柄即ち宗教の説教者である」のが——  
トルストイの眞の、現實の姿である。

すなはち一方には誠實な藝術家、激しい抗議者、深刻な暴露者及び徹底した現實主義者としてのトルストイがあり、他方には裕福な地主でキリスト信者、廢頹した泣虫のインテリゲンチヤ、無氣力な無抵抗主義者、及び空幻な宗教の説教者としてのトルストイがある。これが實にレーニ



ンの云ふやうに「莫大な矛盾」でなくて何であらう。

それならばこの矛盾はどこから來たのであるか？　こゝでしばらく私はトルストイのブルジョア解説者及び批評家の言葉に立ちとゞまらう。彼等と雖もこの矛盾を認めないわけではない。だが、彼等はそのよつて來たところを、専らこの偉大な藝術家の内心に求める。彼等によると、それは生れ落ちるときから偉大な矛盾を附與せられた魂であり、その矛盾が大であるだけヨリ大いに人間的である。しかもこの矛盾の姿こそ人間永遠の姿であつて、トルストイの生涯と藝術とが人人の心を打つのは、その永遠の姿が力強く現はれてゐるからである。彼等のうちの或者は、手取り早い永久の人間眞理の闡明者顔をしてかく説き立てるのである。かう手取り早い斷定を下すかどうかは自ら別問題として、内在批評の行きつく所は、所詮、多かれ尠かれこの範圍を出ることは出來ないのである。こゝでもまた私たちは、現在の日本の文壇に支配的な多くの文藝批評の内容を想ひ出してもいゝであらう。

ところでレーニンは、この「莫大な矛盾」のなかに何を觀てとつたであらうか？　彼も亦トルストイの内心に「偉大」なものゝあるのを認め、凡庸者にまさつた「天才」であることを認めた。だが、この偉大なる天才の現はし來つた「莫大な矛盾」のなかに何を觀てとつたか？　これが大



切な問題である。

レーニンによると、この「諸矛盾は決して偶然（魂に内在して偶然露出したところの——青野）ではなく、むしろロシアの生活が十九世紀の最後の三分の一に経験した、かの矛盾に充ちた諸條件の反映なのである。」

こゝに私たちはトルストイのブルジョア解説者及び批評家から聞くことの出来なかつた、一つの力強い解明と批評とを聞き、トルストイの「偉大」の眞の内容に、直接に接觸し得る機會が始めて與へられたのを感じる。

それならば「ロシアの生活が十九世紀の最後の三分の一に経験した、かの矛盾に充ちた諸條件」とは何であるか。トルストイはそれを如何に「反映」したかを見よう。

數世紀の間つゞいたロシアの農奴制度は、一八六一年の農奴解放令によつて、ともかくも廢止せられ、農奴は形式だけは土地を與へられて、獨立した農民となつた。が、それはたゞ形だけの自由で、搾取の事實は一層ひどくこそなれ少しく軽くはならなかつた。即ちせつかく與へられた農民の土地は次第に大地主に兼併されて行き、一方、ロシアの家長的村落へも資本主義が襲ひかかつて來て、農民の貧窮化を激成した。その結果、農民の間には、日増しの零落や土地喪失にた



いする絶望が高まり、呪ふ可き資本主義にたいする憎悪が燃え立つた。そして諸所に農民一揆が勃發した。

激しい抗議者、深刻な暴露者、徹底した現實主義者としてのトルストイは、まさに當時の農民のこの憎悪、激昂、決意を反映したものに外ならなかつた。

ところで農民はその反抗の裏に如何なるものを求めてゐたか、それは「自由同權の小農の共同團體を建設すること」であつた。ロシアの農民のこの原始共産的なあこがれこそ、ロシアの革命の全過程を貫いて、農民の縫ひ込んだ一線の赤い糸である。

三

トルストイの精神内容たる原始的な「キリスト教的無政府主義」は、農民のこの夢のやうな努力が抽象されて、一つの觀念的な形をとつたものに外ならない。即ち農民のそのあこがれの觀念的「反映」である。

農民は、いま述べた「共同生活の新らしい形態をめがけて努力するに際して、この共同體がいかなる形のものでなければならぬとか、いかなる闘争を通じて自由を戦ひとらねばならぬとか、



農民はいかなる指導者をこの闘争に持たねばならぬとか」等の問題については、「殆んど意識がなく、家長主義的に、痴人の如く之に對したただけである。」「過去全體は農民に、地主と官吏とにたいする憎惡を教へたが、以上のあらゆる問題の答へをどこから搜し出すかといふことを教へなかつたし、教へることもできなかつた。」そして農民の大多數はいたづらに「泣き事を言ひ、祈り、訴へ、夢想し、請願狀を書き、代辯者を（政府へ）派遣」することしか知らなかつたのである。廢頽した泣き蟲、無氣力な無抵抗主義者、空幻な説教者としてのトルストイは、農民のこの一面を、生々しく「反映」したものでなくて何であらう。

レーニンは言つてゐる。「トルストイの思想は吾農民の一揆の弱點と缺陷との鏡であり、家長主義的村落の浮動性と『經濟的小農』の索然たる卑屈性とを反映してゐるのである。」と。

私は告白する。私はこれまでトルストイの生涯と藝術との全體について解脫した多くのものを觀たが、これほど衝込んだ、これほど全體性的な批評を聞いたことがないのである。

レーニンはも一ツ兵士一揆（一九〇五―六年）の例をあげて、飽までトルストイがロシアの生活の「矛盾の反映」であることを實證してゐる。この一揆を起した兵士は、其社會的成分から言へばプロレタリアと農民の中間物であつたが、プロレタリアは極少數で大體は農民出の分子であ



つた。彼等は軍隊内において徹底的に反抗し、その要求は、「自由主義地主や自由主義士官を驚倒せしめた自由権の要求であつた。」此反抗の結果として、軍隊内部での××は屢々兵士の大衆の手に移つたのであつたが、彼等はその××を斷乎として、決定的に使役することは出来なかつたし、またその術も知らなかつた。彼等はまつたく動揺し狐疑してゐた。一方でその捕縛した二三の士官を殺したかと思ふと、數時間の後にはもう他の士官を釋放してしまつた。官權と妥協しこんどは反對に自分達が銃殺の刑をうけ、笞刑を受け、そして元の如く自分達を鐵のやうな羈絆の下に、しばりつけてしまつたのである。

このやうに一方には純然たる反抗者であり、他方には懐疑的な従順な平和主義者である矛盾は、「全くレオ・ニコライヴィツチ・トルストイの精神」の矛盾である。トルストイはその矛盾を體現して、それに恐ろしいまで厚味のある藝術的な表現を與へたが故に、その限りにおいて藝術家として偉大だつたのである。

之でトルストイの全生涯と藝術とが何を意味したか、夫が何の反映であつたかは、十分に解明されたが、レーニンは最初に、「ロシア革命の性質及推進力といふ見地」からトルストイを観ると約してゐる。その見地からすると、その解明で止まつてゐるわけには行かない。トルストイの全



生涯と藝術と教説とが、ロシアの革命の進行にとつて、如何なる「罪」を犯したかを決定しなければならぬ。

聰明な讀者は、トルストイが反映したものの即ち農民の心理及びそれを反映して積極的にトルストイの説いたものが、ロシア革命にとつてどんな「罪」を残したかを、すでに豫斷し得たであらうが、こゝにレーニンの決定的な言葉を書抜いて、この小稿を終らう。

「トルストイは、積り積つた憎悪や、より善きものへの成熟した努力や、過去から自己を解放せんとする希望を挑發したが——だがまた生半可な夢想主義や、政治教育の缺乏や、革命的浮動性やを、再び提供してゐる。歴史的經濟條件は、大衆の××××××の成立の必然性や、この鬭争の準備の缺乏や、『惡に抗する勿れ』といふトルストイ主義が、第一の××××××の失敗の、全的ない原因であつたことを明瞭にしてゐる。」

抗議者、暴露者、現實主義者としてのトルストイは、ロシア革命の過程に大きな貢獻を爲したが、他方感傷家、無抵抗主義者、僧侶主義者としてのトルストイは、その過程に大きな障害を與へたのであつた。

私はこの説明をこゝで委しくしてゐるわけにいかないのを遺憾に思ふ。(二月九日)



## マルクス主義文藝觀について

私はかつて或る短い感想において、謂ゆるアナキズムとボルシェヴィズムとの文學上の見解での闘争にあつては、飽までも文學觀上の論點に興味を有つだけであつて、社會思想上の兩者の論點には、今更、大して興味を感じないと述べた。それに加へて、社會思想上のアナキズムとボルシェヴィズムとの論争は、すでに、日本の社會運動の過程において、即ち實踐において一應は鳧のついた問題であるとも述べておいた。

これにたいして二三のアナキスト文藝家の間から、せつかちな反駁があつたことを私は知つてゐる。それらの反駁文には、種々雑多な論點が、かなり無雜作に、或はほとんど無説明的に、投出されてゐた。が、その中で、いちばん私の注意を惹いたのはアナキストとボルシェヴィスト（コンミニュニスト）との文學觀上の論點と云ふけれども、コンミニュニストの文學觀は、まだ建設され、組織されてゐないではないか、と言ふ反問であつた。これは確かに事實である。餘りに明



白で、それだけ餘りに平凡であり、したがつてそれをわざわざ持ち出す人の非常識を疑ひたくなるほどの事實である。

コンミニュニストの文學觀は、確かにまだ組織されてゐない。エンゲルスが、コンラツド・シュミットに與へた手紙の中で、『理論的になされねばならぬ事柄は非常に多い。特に經濟史の方面、及びそれと政治史、法制史、文學史（傍點は筆者）並に文化史一般との關係の方面においてさうである。そしてそこではたゞ明晰な理論的眼光のみが、事實の迷宮の中に正しい道を指し示すことが出来るのだ。』と述べてから、約二十年の月日がたつが、經濟史の方面はとにかくとして、『それ』と『文學史並に文化史一般』との關係の方面では、ほとんど何等の理論的展開が示されなかつたと言つてよいし、もつと衝きつめて言へば、それを成就するに足る『明晰な理論的眼光』の所有者も、現はれて來なかつたと言つても、決して無暴な獨斷ではないであらう。したがつて、その『關係』を土臺として始めて完全に築造されるコンミニュニストの文學觀が、いまだその初步的の形態をさへなさないとしても、決して不可思議ではないであらう。

この方面で、萬人が認めて『顯著な』貢獻をしたと言はれるのは言ふまでもなくプレハノフである。彼は確かに、美しいほどの豊富な材料を抱えこんで、この方面の理論的建設に努力したが



しかし彼の努力がどれほど、マルクス主義の文學觀の建設にたいして、積極的な貢献をしたかは、疑問としてよいと思ふ。彼の名著と言はれる『マルクス主義の根本問題』に現はれてゐる唯物史觀における藝術現象の地位の説明にしても、また『唯物論史』に現はれてゐるところを見ても、さらにまた最近藏原惟人氏によつて日本語に移された『藝術と社會生活』を見ても、そこにはマルクス主義の方法による文學の取扱ひに對して、幾條かの正しい道をつけたと言ふ位しか、積極的な貢献は見られないのである。例へば『藝術と社會生活』にしても、藝術のための藝術觀と謂ゆる功利主義的の藝術觀との生れ出る社會的條件を究明して、二三の定式を得、それを例の美しいほどの豊富な材料で、説明したまでである。勿論プレハノフの努力は、決して低く見積つてはならない。マルクス主義の文學觀の建設に若干の基礎的な工事を施したことは、十分に認めねばならない。が、彼によつてマルクス主義の文學觀が組織されたなどは決して言はれない。ルナチヤルスキー、ボグダノフ、極く最近ではル・メルテンなどの努力は、この方面に相當の貢献はしてゐるが、それにも拘らずマルクス主義の藝術觀はまだ組織されたとは言はれないのである。私はいつかも或る論文で言つたが、プロレタリアートの文學觀の建設は、今日、世界の共同の仕事なのである。



少しわき道しすぎたが、そんなわけでマルクス主義の文學觀を示せと言はれたつて、私たちは何の恥づるところも無く、そんなものの持合せはありませぬと卒直に、ぶつきら棒に答へるより外はないのである。しかしそれだからと言つて、アナーキズムとコンミュニズムとの文學上の論争では、飽までも文學上の論點しか、私には興味は持てぬと言ふ權利はないなどと、逆襲される筈はないのである。三度び繰返すがマルクス主義の文學觀はたしかにまだ組織されてゐない。しかし藝術現象をもふくめて、一切の人間、社會現象を取扱ふマルクス主義の基礎的方法は、十分に組織せられ、フォミュレートされてゐる。その方法に立脚して、過去及び現在の文學現象を取扱ふことは、『文學觀が組織されてゐない』に拘らず、可能である。否、その方法に立つて過去及び現在の文學現象を取扱ふこと、それがマルクス主義の文學觀を組織する一つの必須過程である。

私がアナーキストとコンミュニストの文學上の論争に於て、飽までも興味を持つと云つたのは、何も出来上つたコンミュニズムの文學理論と、出来上つてゐるであらうアナーキズムの文學理論との論争に興味を有つと言つたのではない。マルクス主義の基礎的方法による文學上の見解と、アナーキズムの方法によるそれとの闘争に興味を有つと言つたのである。



かう言ふとまた氣の早い連中は、マルクス主義の基礎的方法だけで、文學現象が十分に取扱はれるものか、文學現象には文學現象の特殊法則があるのだから、文學現象を取扱ふ上の特殊方法が、そこから發展させられねばならぬと鬚を逆立てるでもあらう。一寸待ち給へ。私及び私たちは、マルクス主義の基礎的方法だけで、文學現象が十分に取扱はれるなどと言ふ、多角形な器へ圓形なものを無理に押し込むやうな、無茶は言はない。文學現象には勿論特殊法則があり、その限りに於て、特殊方法が展開されねばならぬ。それは分り切つてゐる。が、それを展開する過程は何であるか。飽までもマルクス主義の基礎的方法によつて、過去及び現在の文學現象を批判し、討究することをおいて外にない。その過程に於て、マルクス主義の文學批判は深められ、その文學取扱ひの方法は充實せられ、その文學觀は築造されるのである。私だちはいま何處にあるのではない。その過程にあるのである。たゞ私だちには、お恥しい次第であるが、エンゲルスの謂ゆる『明晰な理論的眼光』が缺けてゐるがために、一度誤りを克服したと思ふと再び新しい誤りに踏迷つてゐるのである。それは十分に認める。

(それならばマルクス主義の基礎的方法とは何か、と言ふ問ひが、すぐ様起るであらう。これに十分に答へるためには、唯物辯證法のABCから始めねばならないが、この問ひをお座なりでなく



眞摯に發する人々には、私はマルクス、エンゲルス及びレーニンの著作の若干を、心して讀んで貫ひ度いと要求してもよいであらう。そこには唯物辯證法が、この頃日本で流行の棒切れのやうな味も匂ひもない形でなく、生彩ある形に於て、生きた現象に適用されてゐる。そしてその現象の『現實性』の奥に衝きすゝんでゐるのである。もし夫れ、お座なりと無眞摯で、さう問ふ人に向つては、私はABCの講義をする責任を持たない、と挨拶するより外はない。

我々のこれまでの文學批評は、ほんの初歩的なものであり、文學批評らしい文學批評になつてゐないと言はれても、致し方のないものであり、さう非難する『文學批評家』達のあふれるやうな準備と自信？ にたゞたゞ驚嘆するばかりであるが、そしてまた私たちのこれまで取つた方法が、十分にマルクス主義的でなかつたことも、これを認めるに少しの躊躇もしないが、しかし我が唯物辯證法に立つて、文學現象を取扱つて行かうとしたことは、それを認めて貰つてもいいし、その方法にしたがつて我々の文學を取扱つた結果について、もつと落付いた批判が下されてもいと、私は、常々考へてゐる。そして我々を批難するならば、我々の採つた方法が十分に唯物辯證的になつてゐない點、したがつて我々の『その方法』によつて文學現象を取扱つた結果に對して、衝き込んだ批難が下されてもいと、常々考へてゐる。その意味で、四月の『文藝戰線』